

長野県上水内郡飯綱町

平成30年度・令和元年度
飯綱町内遺跡発掘調査報告書
— 上赤塩遺跡・八蛇口遺跡ほか —

2 0 2 0

飯 綱 町 教 育 委 員 会

例 言

- 1 本書は平成30年度と令和元年度に実施した長野県上水内郡飯綱町における開発事業に伴う試掘（発掘）調査の報告書である。
- 2 調査は飯綱町教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆・編集は調査担当者である小柳義男がおこなった。遺物の実測・トレース・拓本は柳澤まち子、富岡鹿子、横山かよ子、小柳義男による。
- 4 本書に掲載した調査資料（関係図面、遺物、写真等）は、すべて飯綱町教育委員会に保管されている。
- 5 調査体制は次のとおりである。

調査主体者	飯綱町教育委員会			
事務局	教育長	馬島 敦子		
	教育次長	桜井 俊次		
	生涯学習係			
	係長	井澤 勇二（～31年3月）		
	係長	小林 恵一（31年4月～）		
	担当係長	小山 丈夫（31年4月～）		
	主幹	小山 丈夫（～31年3月）		
	主幹	和田 俊聡		
調査担当者	いづな歴史ふれあい館長	小柳 義男		
調査参加者	横山かよ子	富岡 鹿子	柳澤まち子	細野 利男
	木賀田剛夫	小林 浩道	小柳 茂人	
整理参加者	横山かよ子	富岡 鹿子	柳澤まち子	
調査協力	富樫 均	永野 稲雄	大内 武司	石井 賢郎

- 6 本報告書に記載した遺跡の調査をおこなうにあたり、関係する多くの方々にご支援・ご協力をいただいた。記してお礼を申し上げます次第である。

目 次

I 飯綱町の環境と遺跡	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
II 調査の内容及び成果	4
1 上赤塩遺跡	4
2 表町遺跡	19
3 八蛇口遺跡	20
4 裏町遺跡	26

I 飯綱町の環境と遺跡

1 地理的環境

飯綱町は長野県の北部に位置し、東北部は旧下水内郡豊田村（現中野市）、南は長野市及び旧下水内郡豊野町（現長野市）、西北部は上水内郡信濃町に接する。

飯綱町からは、北信濃において北信五岳の名で親しまれている飯縄山（飯綱山）、戸隠山、黒坂山、妙高山、斑尾山を一望でき、町城の西端は飯縄山（1,917m）、北端は斑尾山（1,381m）の両火山に接している。町域には両火山の噴出物が広く厚く堆積する。

町城のほぼ中央部には戸隠山を源とする鳥居川が北西から南東に流下し、旧豊野町で千曲川に合流している。鳥居川を境に左岸（北部）が旧三水村、右岸（南部）が旧幸礼村であった。

北部には斑尾山を源とする斑尾川が流れ、芋川地区を潤して南下した斑尾川は倉井地区の南側で大きく北東に流れを変えて赤塩地区に入り、旧豊田村を経て千曲川に合流している。南部には飯縄山を源とする八蛇川や八蛇川に注ぐ滝沢川が流れ、高岡地区を東流し幸礼地区で鳥居川に合流している。

飯綱町は、日本海に面する新潟県の高田平野と長野盆地を結ぶ途上であり、日本海（新潟県上越市）までは約50kmの距離である。古くから信濃と越後を結ぶ交通の要衝に位置しており、古代の官道である東山道から分かれ、越後国府（上越市付近）に至る東山道の支道や、江戸時代初期に整備された北国街道が通っていた。

2 歴史的環境

時代別に主要な遺跡を概観しておく。旧石器時代は表採資料が主で十分様相がつかめないが、飯縄山麓のだづま原遺跡（遺跡番号18、以下同じ）、宮浦遺跡（2）などで尖頭器等が出土している（中村1997）。西柳川遺跡（3）では台形石器が、宮浦遺跡からは上部野尻湖層Ⅱ最上部の漸移帯（モヤ）からスクレイパーが出土している。町内最古の資料である。「飯綱町遺跡詳細分布調査報告書」の刊行後も、2017年つづじヶ原遺跡（19）、2018年二十塚（190）で旧石器が出土している。

縄文時代草創期は、だづま原遺跡から尖頭器、スクレイパーなどが（中村1997）、下向山遺跡（4）から有茎尖頭器が出土しており、原遺跡（124）からは、多縄文系の土器群などが表採されている（小柳1983）。

早期の遺跡も小規模であるが高坂の丸山遺跡（31）から出土した絡状体瓦痕土器は、社会科の資料集に掲載されるなど広く知られている（高橋ほか1979）。宮浦遺跡では、一列に並ぶ大規模な落し穴状遺構が検出されている。

前期の遺跡は丸山遺跡、原遺跡、伊豆ヶ入遺跡（200）などがある。丸山遺跡からは関山期の住居跡1棟と諸磯期の土坑18基が検出されている。17号土坑からは、ほぼ完形の大小2個体の有孔浅鉢形土器が出土した（高橋ほか1979）。伊豆ヶ入遺跡（芋川遺跡と報告されていることもあり）は古くから知られた遺跡で藤森榮一や神田五六によって紹介されている。小野遺跡（198）からも有尾期の住居跡が1棟検出されている（笹澤ほか2012）。

中期の遺跡には上赤塩遺跡（161）、東柏原遺跡（206）、古城遺跡（123）と規模の大きな遺跡がある。上赤塩遺跡は中央部に広場をもつと思われる弧状の集落遺跡で、中期前葉から中葉の13棟の住居跡が検出されている（小柳1997）。2018年の調査では、新たに2棟の住居跡（中期）が検出された。小玉遺跡（43）からは中期後葉の住居跡1棟などが検出されている（笹澤・横山ほか2008）。

後期の遺跡は明専寺遺跡（15）から2棟の住居跡や土坑が、八蛇川を挟んだ対岸の茶磨山（茶白山）遺跡（26）からも大量の土器・石器が出土している（森・島田1980）。小玉遺跡からは後期初頭から中葉に至る土器群が多数出土している。小野遺跡からも敷石住居跡1棟などが検出されている。

晩期の遺跡は茶磨山遺跡、橋詰遺跡（旧栄町遺跡を含む）（63）などがある。

弥生時代・古墳時代の遺跡は希薄であるが、長野盆地を見下ろす平出地区の南部に古墳がある。庚申塚古墳

(110)は全長約52mの前方後円墳である。墳丘裾部の調査で葺石状の石列と埴輪が検出されている。埴輪は朝顔形埴輪と円筒埴輪があり、円筒埴輪には類例の少ない格子目叩きが施されている(小柳1994)。鍛冶久保古墳(111)からは直刀(太刀)、剣、鉾、鉄斧、鉄鍬、刀子、砥石とともに、鋳造の斧状鉄器が2点出土している(小柳1994)。ともに注目される遺物である。

奈良時代の遺跡も希薄である。平安時代になると遺跡数は急増するが、規模の大きな遺跡は確認されていない。丸山遺跡からは3棟の竪穴住居跡が、前田遺跡(53)からは4棟の竪穴住居跡と掘立柱建物跡等が検出されている(島田ほか1981)。このほか、平出地区を中心に須恵器の窯跡が集中しており、前高山(82)(笹澤ほか1986)、上ノ山(86)(小柳ほか1992)、家岸(88)(横山ほか1998)の各窯跡が調査されている。製品の搬出には牟礼地区を通過していたと考えられている東山道の支道も利用されたものと思われる(小柳ほか1992)。

平安時代末から鎌倉時代にかけて、町内は芋川荘(芋川地区)と太田荘に属す区域に分かれていたようである。太田荘域には島津権六郎が居城したと伝承される矢筒城館跡(60)がある。山城は矢筒山を利用し、麓に館跡がある。南側の表町遺跡(62)は城下であったと伝承されてきた。数次にわたる矢筒城館跡と表町遺跡の調査によって、幅9~12m、深さ3.5mにおよぶ内堀の一部や南北350mにわたる15世紀後半から16世紀前半の集落跡が確認された(中野2009、笹澤・原田ほか2014)。芋川荘域には、芋川氏館跡(144)、若宮城跡(201)、鼻見城跡(193)、小野遺跡などがある。芋川氏館跡を中心とする数次の調査で、館の主郭は8m幅の堀に囲まれた一辺60mの方形区画であったこと、堀底には変化に富んだ障壁土坑からなる障子堀が設けられていたことなど重要な所見が得られている(笹澤ほか2003・2004、笹澤・横山ほか2014)。小野遺跡からは12世紀後半~13世紀前半に始まる建物群が検出されており、14世紀代の空白期をさきで15世紀前半まで継続する。芋川荘の現地管理者である在地領主層の館の可能性が高いことが指摘されている(笹澤ほか2012)。

2018年に調査された二十塚では、調査した6基の塚すべてで、盛り土を突き固めながら構築していることが明らかになった。3基からは、5点の宋銭が出土している。また、下限を示す資料となる可能性のある焙烙型の内耳鍋が出土するなど、塚の構築方法や年代について重要な所見が得られた(小柳2019)。

近世の遺跡では、江戸時代末期に創業された赤塩焼窯跡(167)の出土遺物が報告がされている。甕、紅鉢、片口などの製品のほか信越鉄道の建設にともない県内で最初に製造された煙灰、窯道具などの出土も確認されている。(小柳2015)。



挿図1 調査地点(飯綱町役場 平成25年1月作成 1:50,000地形図使用)

Ⅱ 調査の内容及び成果

1 上赤塩遺跡 (挿図1-1)

A 調査の概要

所在地	飯綱町大字赤塩境ノ峯798番地、799-1番地 北緯 36° 45' 18" 東経138° 16' 51"
原因	個人住宅兼店舗建設
調査方法	発掘調査
調査期間	平成30年5月8日～11日、5月14日～6月13日
調査面積	約400㎡ (試掘範囲を含む)
出土遺構	住居址2棟、土坑状遺構10基、柱穴状遺構60、溝状遺構1
遺物	縄文中期土器片 (保存収納箱20箱)、土偶、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石皿等

B 調査の経緯と遺跡の概要 (挿図2)

調査地は文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地 (遺跡)」にあたる上赤塩遺跡 (161) に含まれる。遺跡中央付近に個人住宅兼店舗の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

上赤塩遺跡は、飯綱町大字赤塩字境ノ峯、字西原に所在するが、古くから「上赤塩遺跡」として知られてきたため「飯綱町遺跡詳細分布調査報告書」でも上赤塩遺跡と表記している。

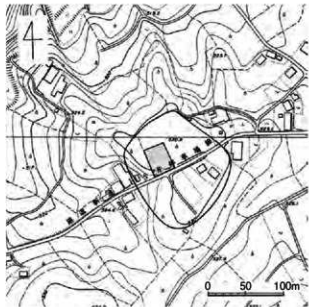
遺跡は北西側を流れる斑尾川に向かってはり出す台地に位置する。台地の最高地点は530.9mで、530mの等高線が東西100m、南北130mの範囲を囲む。東西および南方向はゆるく傾斜しているが、斑尾川が流れる北西側は486m前後の河床面まで急な傾斜となっている。

台地の中央部は腐植土の堆積が少なく、耕作土 (15～20cm) 下はわずか数cmで黄褐色粘質土 (いわゆるローム層) に達してしまう。このため遺構も耕作の影響を受けている。

上赤塩遺跡は「信濃史料」第1巻 (1956年) に「(縄) 打石斧」の出土が記されているのが初出の遺跡である。1960年7月には神田五六氏によって西原772番地の調査が行われている。1967年にも北部高校による調査も行われているが、ともに報告書は未刊である。

1991年「斜行沈線文土器」の位置付けを追及していた寺内隆夫氏によって、永野氏採集資料のうち「縄文中期前葉から中葉の土器に絞って報告」が行われた。上赤塩遺跡の土器群が詳細に分析され、その特徴が明らかにされることとなった。寺内氏の報告では、上赤塩遺跡の土器群の特徴を大きくとらえると「中期前葉では五領ケ台Ⅱ式に並行する段階から資料の増加が認められ」、「広い地域の土器の特徴を取り入れて在地化させており、排他性は少ない」こと。さらに「中期中葉に入っても、土器の出土量は衰えず、集落が安定した状態で継続されていたことが予想」されること。土器の様相からは「他地域との交通を保ちながらも、北陸系と中部高地系の綱引きの中から在地性を強めていくように見受けられる」といった点を指摘している。

また、それぞれの時期の土器の特徴として、中期前葉には、千曲川・犀川地域の土器、在地性の強い土器 (深沢タイプと称される土器など)、もっとも強い影響を受けたもののひとつとしての北陸系土器、関東地方の影響を



挿図2 上赤塩遺跡 範囲と調査地

受けた土器、分水嶺から南側の中部高地～西関東にかけての土器（影響はわずか）が存在すること。中期中葉初頭（上赤塩4期）になると、分水嶺以南の影響が強まってくる。もっとも顕著には、斜行沈線土器に見られる横位栴形区画文を採用すること。その他の基本となる装飾要素は、依然北陸系の土器と共通するものが多いこと。上赤塩5期以降になると、区画文をはじめとする器面の分割、区画化の影響がなくなり横方向に流れる渦巻文が主装飾となっていく（分水嶺以南の区画重視の土器に対する差異の強調）こと。上山田、天神山式や火炎型土器といった日本海側の土器と共通した理念に支えられていること。小地域（上赤塩遺跡周辺地域）の独自性（上赤塩Ⅲ群5類一焼町土器に並行する土器）がみられることを指摘された。

1995年には、遺跡内を通過している県道の拡幅に際して発掘調査が実施され、住居跡13棟等が出土した。調査者は「限られた調査範囲であったが、遺跡の中央部をほぼ横断するトレンチを掘った形になった。遺構の分布をみると13軒の住居跡は東西に分かれ、その内側に土坑群が分布し、さらに内側は遺構も遺物もみられない区域となる」。「住居が台地の周縁部にそって弧状に分布し、その内側に土坑群が分布し、中央部に広場を持つかなり規模の大きな集落の存在が予想される」と記している。出土遺物については、中期前葉を主として中葉にかけての地元の土器が多いこと、土偶の製作方法（「ほぞ・ほぞ穴」方式）が北信濃から北陸方面に特徴的な技法として存在する可能性のあることなどを指摘している（小柳1997）。

（本遺跡の調査の経緯と概要等は、昨年度も報告している（小柳2019）。本報告と内容が重複することを承知されたい）

C 調査の結果

1 試掘調査の概要

調査地は1995年の県道拡幅に伴う調査区の北側に接して位置しており、果樹園として利用されていた。報告書で「中央部に広場を持つかなり規模の大きな集落の存在」が予想されたが、まさしくその中央部と目される地点であった。このため、その検証もかねて6か所にトレンチを設定した。その結果、住居跡状の落ち込みや柱穴状の落ち込みが確認されたためいったん試掘調査を終了し、測量基準点を設定してから本発掘を実施した。

2 発掘調査の概要

① 測量基準点（T1・T2）の設置とグリッド設定

株式会社こうそくに委託した。2点の測量基準点座標はネットワーク型RTK法（単点観測法）で求めたもので、T1（X 83816.575 Y -19561.043）（北緯36°45′18.7″、東経138°16′51.3″）、標高531.516m、T2（X 83792.619 Y -19600.194）（北緯36°45′17.9″、東経138°16′49.7″）の地点である（測量基準点の数値は、世界測地系2011による）。これを基準に4m間隔のグリッドを設定した。T1地点の標高点（県境界枕上：標高531.516m）については、地形図の数値と照らし合わせると疑問が残る。

② 層序：基本的にはⅠ層（表土・耕作土）、Ⅱ層（黒色土）、Ⅲ層（褐色土層）、Ⅳ層（黄色粘質土層・ローム層）となるが、現地表下20～25cm程度でⅣ層に達するため、Ⅱ、Ⅲ層は耕作の影響を受けて確認できないところもある。なお南端部分は堆積が厚くなり、Ⅲ・Ⅳ層間を分層している。

③ 遺構：住居跡2棟、土坑状遺構（以下：土坑）10基、柱穴状遺構（以下：柱穴）60か所、溝状遺構（以下：溝）1か所を検出した（第1図）。多くはⅣ層へのⅢ層（一部Ⅱ層）の落ち込みとして検出した。住居跡は、西南隅に2棟切りあう形で検出した。土坑や柱穴の遺構の分布も遺跡の西側に集中する傾向がみられた。中央部に遺構・遺物が少ない傾向も確認できた。

④ 遺物：住居跡および溝の周辺から集中して出土した。縄文中期の土器片のほか、土偶、石鏝、打製石斧・磨製石斧、石皿（刻文付石皿あり）、凹石、敲石等の石器も出土している。このほか、柱穴（P37）から、ドンクリ類の実が出土している。

3 出土遺構と遺物（第1図～第18図・写真1～33）

今回の調査で出土した土器は38.9kgほどになる。破片の大きなものや特徴的なものはできるだけ図版に掲載したが、遺憾ながら全体の量からするとわずかなものである。図化した土器の説明にあたって、以下の言葉は使い分けたいつもりである。ただし、判別しにくいものもあり判断を誤ったものもあるかもしれない。

隆 帯：粘土紐の貼り付けによる連続する高まり

半隆起線：竹管状工具で器面を引くことによって、並行する沈線の間が隆起線状になったもの

平行沈線：竹管状工具によって引かれた並行する沈線。浅く、半隆起線ほどに盛り上がらない

沈 線：ヘラや棒状の工具で引かれた線

文様構成などからいくつか分類した（複数の様相を示す土器や同一個体でも部位によって異なる分類になることは十分ありうる）が説明を簡略にするためのものである。

(1) 住居跡と出土遺物

① SB1（第2図・写真15）

K19を中心に検出した。南端はSB2とSX1に重なり壊されている。確認できたのは長さ4.8mほどである。およそ径5.5mの円形の住居跡になるものと思われるが、大部分は西側調査地外に広がる。壁の立ち上がりは30cm、床面ほぼ平らで検出範囲では柱穴を確認できなかった。覆土は、極暗褐色土（7.5YR2/3）で炭が混じり、よくしまっていた。

ア 縄文時代の土器（第8図～第9図）

土器は、5.7kgほど出土している。縄文時代早期の土器片が3点まじるが、他は中期の土器片である。小片が多く、図化できるものは少なかった。

・縄文時代早期の土器

押型文土器（第8図5～7）が3点出土している。すべて山形の押型文である。胎土には白い粒が含まれる。

5・6は同一個体かもしれない。

・縄文時代中期の土器（第8図1～4・8～31、第9図32～35）

Ⅰ 縄文を持つ土器

隆帯を持つ土器（1・12）

1は大型の深鉢である。口縁部下に一条の低い隆帯がまわる。表面は横あるいは右下がりのなでによって整えられているが、くぼんだ器壁の部分に縄文が残る。胎土に雲母が含まれる（以下：雲母を含む）。12は口縁部下に隆帯で区画をつくる。区画内は無文である。雲母を含む。

隆帯や半隆起線の脇を連続刺突する土器（21・22）

21の左の隆帯脇の刺突は沈線を引いた後に施しているように見える。22は雲母を含む。

隆帯と沈線で文様構成する土器（2・30）。

2は沈線で引かれた渦巻文がめだつ。渦巻文の脇を垂下する2本の隆帯間は無文帯になっている。隆帯上は、幅の狭い工具で（上から下方向に）、連続して抉るように押し広げられている。30は隆帯脇に竹管状工具によって沈線が引かれている。雲母を含む。

半隆起線で文様構成する土器（32）

32は曲線部分がB字状をなすものかもしれない。

平行沈線を施文する土器（3・26・31）

3は胎土に雲母が含まれる。26は直線と波状の曲線が交互に垂下する。31は胎土に白い粒が含まれる（以下：白い粒を含む）。

折り返し口縁を持つ土器（28）

撚糸文のみが確認できる土器（33）。

33は雲母を含む。

縄文のみが確認できる土器（34・35）

34・35ともに雲母を含む。

Ⅱ 縄文を持たない土器

隆帯（半隆起線）上にC字状の刺突を連続施文する土器（14・16・17）

14は口縁部下の隆帯およびその下の沈線内さらにその下と、刺突が連続する。それぞれの形が異なっている。白い粒を含む。16はC字状刺突を施された隆起線に続く、幅広の隆帯の両側に深めの沈線が間隔をあけて施文される。隆帯脇は深い沈線を引く。17はC字状刺突を施された半隆起線の間を交互刺突でうめている。白い粒を含む。

隆帯や半隆起線の脇を連続刺突する土器 (15・25)

15は口縁部と口唇部に交互刺突を施す。口縁部下には刺突が連続して施されている。白い粒を含む。25は底部まで半隆起線が垂下している。

半隆起線で文様構成する土器 (8・23・24)

8は橋状の取っ手を持つ。取っ手の左縁は隆帯となって頭部につながる。竹管状工具によって区画された内部を右下がりの半隆起線によってうめる。その後左下がりの沈線が浅く施され格子状になっている。胎土に雲母が含まれる。23は右下がりの沈線(半隆起線)が引かれた後、左下がりの沈線がともに竹管状工具によって引かれる。24は右下がりの沈線(半隆起線)は竹管状工具によって、左下がりの沈線は先の細い棒状の工具で引かれる。雲母を含む。

平行沈線を施文する土器 (10)

口唇と口縁部にかけて、竹管状工具で横方向に沈線を引く。無文帯をはさんで下部にも沈線が引かれるが、竹管状工具によるものか明瞭でない。雲母がめだつ。

沈線で文様を描く土器 (18)

18は細い沈線で渦巻状の模様をえがく。あまり手慣れていないようである。白い粒を含む。

指頭瓦痕をもつ土器 (20)

20は横方向の低い隆帯下に、幅広の波状の沈線が施されている。

折り返し口縁を持つ土器 (29)

29は口縁から下がったところに円形の刺突が連続している。雲母を含む。

波状口縁の土器 (9・13)

9は三角状に上がった口縁部になる。白い粒を含む。13は越後の火炎土器の系列につながる土器である。隆帯や半隆起線によって飾られた把手である。胎土は白みをおび白い粒が含まれる。

ミニチュア土器 (4)

4は底径3.8cmと小形の土器である。

赤彩された土器 (11)

口縁部の破片。口縁部下に隆帯の曲線がならび、その間のすき間を竹管状工具による沈線を施す。赤彩は薄れているが全面に施されていたようにみえる。

漆を塗った土器

図示しなかったが、小片が1点出土している。一辺2.5cmほどの三角状の土器片の表面全体が黒びかりしている。雲母を含む。

イ 石器 (第16図1～4、第17図25・26)

石鏃 2点出土している。1点は未製品である。

1は片脚部を欠く。径4mmほどもある夾雑物が含まれる。長さ2.8cm、幅1.2cm、重量1.0g。黒曜石製。このほか、黒曜石の小破片(17g)の中に、作りかけと思われる石鏃の脚部があった。製作途中で破損したようである。

打製石斧 2点出土している。3は打製石斧としたが、薄手で刃部の整形も不十分なので製作途上の剥片かもしれない。長さ8.0cm、幅5.0cm、重量49g。頁岩製。

横刃型石器 2点出土している。2は縦長の剥片を利用している。図の下辺に細かな剥離が集中する。長さ4.8cm、幅8.1cm、重量38g。頁岩製。4は横長の剥片を利用している。長さ9.1cm、幅3.6cm、重量46g。頁岩製。

敲石 8点出土している。石材は安山岩1点、砂岩4点、泥岩1点、粘板岩1点、凝灰岩1点である。26は川原石を利用したもので、両端にわずかなつぶれがみられる。長さ13.9cm、幅5.6cm、重量428g。粘板岩製。

磨石 1点出土している。25は全体が良く磨かれ、すべすべしている。端部に剥離がみられるので、敲石として利

用した可能性もある。長さ8.2cm、幅6.1cm、重量199g。曹長岩石（アルビタイト）製。

この他に四石1点と石皿の小破片1点が出土している。

② SB2（第2図・写真13・14・16）

L19を中心に検出している。南側調査地外に広がる。平成7年の調査図と重ねてみると（第7図）遺憾ながら南側部分は、平成7年の調査で確認できずに壊してしまっただけの可能性もある。

検出した範囲では、長さ5m。およそ径5.6mの円形の住居跡になるものと思われる。西端部はSB1を切っている（壊している）が、SX1に壊されている。東端はSD1と重なり合って新旧の区別がつけにくかった。SB1の壁の立ち上がり部分がわずかに残る状況からSD1によって壊されたものと判断したが、覆土はよく似ており、さほど時期差がないものと思われる。北側の壁は30cm以上の立ち上がりがある。床面はほぼ平らで、柱穴は2か所検出した。P1は長さ50cm、幅33cm、深さ24cmほどになる。柱穴の覆土中から石皿片が出土している。P2は長さ60cm、幅30cm、深さ20cmほどになる。北側の弧状の落ち込みが早くから確認できたので、中央部分ではⅢ層を含め住居内出土遺物として取り上げている。以下a層（黒褐色土：7.5YR2/2）b層（極暗褐色土：7.5YR2/3）となっている。東西両端部ではb層が厚く、その下にc層（黒褐色土：7.5YR2/2）が堆積する。遺物はⅢ層下部からa層中に集中する。a層には焼土や炭化物も混じる。

ア 縄文時代中期の土器（第9図36～第10図93）

土器 土器の量は14.7kgほどになる。おおむね層序にそって遺物を取り上げたつもりであったが、調査時の土層の検討が十分でなく、東西の両端部の堆積状況を反映させられなかった。ここでは、床面直上として取り上げた遺物のみ明記しておく（第10図83～93）。

Ⅰ 縄文を持つ土器

隆帯と半隆起線で文様を構成する（46・60 70・71・75・87）

46は隆帯上に縄文が施される。隆帯の下には半隆起線が引かれる。半隆起線の間に交互刺突が施される部分がある。60は白い粒を含む。70は半隆起線部分が確認できるだけである。白い粒が含まれる。75は薄手で硬い。87は燃糸文を地文とする。補修孔と思われる孔は工具を回転させてあけている。雲母がめだつ。

口縁部や隆帯（半隆起線）上にC字状の刺突を連続施文する土器（62・63・64）

62は口唇部と、半隆起線上にC字状の刺突が連続して施される。逆U字状文の下に縄文が施される。器壁が薄く、焼成は良好である。63は波状口縁部分である。口縁部下を半隆起線でみだした後、隆帯状に刺突を施文している。これと前後して逆U字状文と口縁部の間に沈線を引いている。雲母がめだつ。64は口唇部に施文されている。半隆起線の下は沈線が連続して（集合沈線）施される。

隆帯や半隆起線の脇を連続刺突（47・54・78・91）

47の刺突は深めに施されている。54は雲母を含む。78は交互刺突も施されている。雲母がめだつ。91の刺突は幅広く深い。雲母がめだつ。

半隆起線で文様を構成する土器（51）

51は胴部に縄文が施されている。白い粒が含まれる。

半隆起線と沈線で文様を構成する土器（57・79）

57は半隆起線内を縦・横の鋭い沈線で区画する。白い粒が含まれる。79は縄文を施した後、半隆起線や右下がりの沈線を引いている。雲母や細かな石粒が含まれる。

平行沈線を持つ土器（38・53・55・56・72・77・80・92）

38は雲母がめだつ。55・72は白い粒が含まれる。80は横方向の並行沈線も施されている。77は燃糸文が施されている。雲母が含まれる。92は雲母が含まれる。

燃糸文のみ（61）

61は雲母がめだつ。

縄文のみ（41・81・82・93）

41は雲母がめだつ。93は白い粒や石粒が多く含まれる。

II 縄文を持たない土器

隆帯を持つ土器 (36・90)

36は隆帯で頭部(胴部)を区画する。白い粒や細かな石粒が多く含まれている。90はワラビ手状(「の」の字状)裝飾部分が剝離したものか。内側は円形にくぼむ。表面は円形内に沈線を引いてワラビ手の頭の部分を表現する。隆帯上や半隆起線の上にC字状の刺突を連続施文する土器(43・44・59・85)

43は隆帯下を沈線によって格子目状にする。縦線のあとに横線を引いている。雲母を含む。44の隆帯下には数本の沈線が引かれる。沈線の脇を連続して刺突する部分がある。雲母を含む。59は肥厚した口縁部にC字状の刺突を施す。半隆起線の間は交互刺突でうめる。85の刺突は半切にした竹管状工具を斜めに押し上げるように施文している。C字状部分に半隆起線がつながったような圧痕となっている。半隆起線の間は交互刺突が施された部分もある。雲母を含む。

隆帯や半隆起線の脇を連続刺突する土器 (68・74・84・86・88)

68は他の分類とも重複する要素を持つ。(半)円形の工具の先端を半隆起線に押し付けるように施文している。雲母を含む。74は無文帯を持つ。雲母がめだつ。84は口縁下に3条の半隆起線が引かれる。一番下の隆起線脇を刺突する。刺突の下に左下がりの沈線が一本みえるが全体の構成は不明である。雲母を含む。86は深沢遺跡第2類土器の継ぎ手文と似る。最上部の半隆起線の脇に刺突が施される。白い粒が含まれる。88は半隆起線間に交互刺突を連続させている。

半隆起線状で文様構成される土器 (52・76・89)

52は渦巻文の部分である。胎土に白い粒が含まれる。89は胎土に雲母や細かな石粒が多く含まれる。

半隆起線と沈線で文様を構成する土器 (45・48・50・65・69)

45は沈線で渦巻き状の模様を施す。白い粒や石粒が多く含まれる。48・50は半隆起線で区画された内部を斜交する沈線でみだしている。48は雲母がめだつ。65は内面の口縁下によって沈線が引かれている。右下がりの半隆起線を引いた後から左下がりの沈線が浅く引かれている。雲母が含まれる。69は雲母や酸化した安山岩の粒が含まれる。半隆起線と脇にひかれた沈線(4単位か)間を刺突でみだす土器(40)

40は底部付近まで半隆起線とそのわきの沈線が垂下する。その間の器面を先の細い工具で連続的に刺突しうめている。

波状の口縁を持つ土器 (37・58・83)

37の半円状の突起内は丸くくぼむ。口縁部下は短い沈線が引かれる。竹管状工具によって引かれた半隆起線(3条)の下は無文帯となる。北陸系の土器を思わせる。58は指頭状の突起が2つ並んだ口縁部になる。口縁から下がる隆帯をはさんで半隆起線が引かれる。雲母を含む。器面が荒れて明瞭でないが赤彩が施されているのかもしれない。83は半円状の突起部に「の」字状の粘土を張り付けている。雲母を含む。

連続する刺突を持つ土器 (67)

67は口縁部の破片のようにみえるが明瞭でない。中空の細い管状のもので施文している。

沈線と刺突で文様構成する土器 (66)

66は口縁下に引いた横方向の沈線内に刺突が施されている。器壁が薄い。胎土に雲母を含む。

沈線で格子目文を描く土器 (73)

73は半隆起線などで区画された内部の文様かもしれない。胎土に雲母が含まれる。

無文の土器 (39・42)

39は底部にいっゆる網代痕がついている。胎土に雲母を含む。42は胎土の雲母がめだつ。

土偶 (第15図1～3、写真25・26)

3点の土偶が出土している。1は尻から肩にかけての部分である。臍(へそ)と思われるふくらみを中心にU字状の沈線が4条施される。左向きから尻にかけても同様な沈線が施されている。背中から尻にかけては、内側をくぼませるように整える。脚部は欠損している。酸化した安山岩の赤い粒が含まれる。2は床面直上で出土している。

足の部分と思われる。指先で形を整えているようにみえる。破損面はなめらかである。他の塊との接合のためかもしれない。底に圧痕状のものがみえるが明瞭でない。3も床面直上で出土している。腰の付近の破片と思われる。細い沈線で、縦やU字状に施文しているものと思われる。下部の破損面は内側にすぼみ、なめらかである。他の塊との接合のためかもしれない。少量の雲母を含む。

土製円盤（第11図106）

106は竹管状工具によって格子状に施文された土器片の周囲を整えている。雲母が多く含まれる。

イ 石器（第16図5～14、第17図27～33）

石鏃（第16図5～9）

5点出土している。5～8は黒曜石製。形は様々で統一性は感じられない。5は長さ2.6cm、幅1.4cm、0.5g。6は長さ1.8cm、幅1.3cm、0.2g。7は長さ2.2cm、幅1.5cm、1.0g。8は長さ1.6cm、幅1.3cm、0.3g。9は長さ2.3cm、幅1.5cm、1.1g。チャート製

打製石斧（第16図11～14）

6点出土している。11～13は端部が欠損している。すべて頁岩（粗粒砂岩）製である。11は長さ9.2cm、幅4.7cm、115g。12は長さ8.7cm、幅4.8cm、79g。13は長さ8.2cm、幅4.7cm、91g。14は長さ12.1cm、幅4.3cm、165g。

磨製石斧（第16図10）

小さな破片が1点出土している。破損部を除きよく磨かれている。長さ3.8cm、幅2.6cm、21g。緑色の變成岩製。

敲石（第17図31・33）

10点出土している。31は床面直上から出土している。川原石を利用したもので一端が欠ける。端部と側面に打撃によると思われるつぶれ痕が確認できる。長さ7.5cm、幅4.5cm、141g。砂岩製。33は柱穴（P1）内から出土している。全面よくみがかれている。側面につぶれ痕がみられる。長さ9.6cm、幅8.1cm、572g。安山岩製。

石皿（第17図32）

柱穴（P1）内から1点出土している。板状で両面がていねいにすられている。長さ8.1cm、幅8.9cm、308g。安山岩製。

凹石（第17図28～30）

4点出土している。28は両面に浅いくぼみがある。両端につぶれ痕があり、敲石としても使用されたようである。熱を受け変色したように見える。長さ9.0cm、幅5.4cm、224g。安山岩製。29は床面直上から出土している。両面に浅いくぼみがある。端部につぶれ痕があり、敲石としても使用されたようである。長さ7.7cm、幅6.2cm、255g。安山岩製。30も床面直上から出土している。擦って全体の形を整えている。浅いくぼみが表面にある。長さ6.5cm、幅7.1cm、314g。安山岩製。

方形板状石器（第17図27）

1点出土している。周囲を擦って四角に整えている。表裏も凸凹はあるものの滑らかである。用途は不明である。装飾品であろうか。長さ4.0cm、幅3.7cm、18g。凝灰岩製

2 土坑と出土遺物（挿図3、第1・11・16・17図）

SK1（挿図3、写真9）

J13で検出した。ほぼ円形（長径105cm、短径90cm）で深さ55cmほどになる。SK6の一部を壊している。検出した土坑ではとびぬけて大きい。土器片12点と敲石1点（安山岩製）、磨製石斧1点（緑色の變成岩製、35g）の破片が出土している。

SK2（挿図3、第11図99）

N18で検出した。長さ40cm、幅25cmほどの大きさである。深さは10cmと浅い。全体の半分ほどは未調査である。99は器面が摩滅して明瞭でないが口縁直下に縦の短い沈線が並ぶ。その下を横位の半隆起線、無文帯をはさんで二本の半隆起線を施す。無文帯から下部の半隆起線にかけ、突起状の粘土塊が貼付される。胴部は垂下する半隆起線でみだされる。白みを帯びた胎土は北陸系の土器を思わせる。

SK3 (挿図3)

K18で検出した。長さ55cm、幅30cm、深さ23cm。土器片3点、黒曜石片1点が出土している。

SK4 (挿図3)

L13で検出した。ほぼ円形をしている。長径65cm、短径55cm、深さ30cm。黒色土(7.5YR2/1)の落ち込みであったが非常に硬く、炭も混じる状況から縄文時代のもつと判断した。遺物は出土していない。

SK5 (挿図3、第16図15)

K13で検出した。ほぼ円形をしている。長径55cm、短径45cm、深さは7cmと浅い。第16図15の打製石斧が1点出土している。長さ89cm、幅6.1cm、118g。砂質泥岩製。端部が欠損している。

SK6 (挿図3)

J13で検出した。SK1によって一部切られているため全体の大きさは不明であるが、長さ30cm、幅40cmほどの部分を確認している。深さは25cmほどである。遺物は縄文時代の土器片10点出土している。

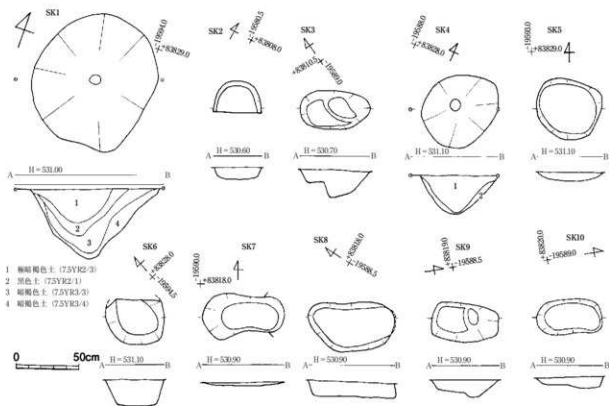
SK7 (挿図3)

K16で検出した。SK8の西側を切っている。長さ65cm、幅30cm、深さ3cmほどとごく浅い。耕作に伴うものかもしれない。遺物は出土していない。

SK8 (挿図3、第11図100、第17図35)

K16で検出した。長さ70cm、幅32cmほどの小判形をしている。深さ11センチと浅い。一部SK7と重なっている(SK7が新しい)。

出土遺物 100の内面はていねいに整形され、黒くろしている。器壁は薄いが硬い。胎土に白色の粒や細かな石粒がめだつ。縄文の中に沈線が一本施されている。当地ではみられない土器である。このほか半隆起線を持つ薄手の土器片10点余が出土している。35は石皿の破片である。破損した後に熱を受けたようで、皿面と周辺の断面が薄黒い。長さ10cm、幅7.5cm、314g。安山岩製。



挿図3 上赤塩遺跡 土坑実測図

SK9 (挿図3)

L15で検出した。ほぼ小判形をしており長さ52cm、幅30cm、深さ13cmほどになる。遺物は土器片1点が出土している。

SK10 (挿図3)

L15で検出した。ほぼ小判形をしており長さ51cm、幅26cm、深さ10cmほどになる。遺物は縄文土器の底部など10点と磨石が1点(安山岩製)出土している。

SX1 (第2図・第11図103~105)

SB2と重なって一部を検出した。SB2の南端を壊している。西側の調査区域外に広がるため全体の形をつかめなかったが長さ90cm、幅50cmほどになる。深さは検出面から55cmほどになる。覆土は1(黒褐色土:7.5YR2/2)、2(極暗褐色土:7.5YR2/3)、3(黒褐色土:7.5YR2/2)、4(褐色土:7.5YR4/1)という状況であった。土坑状の遺構かと思われる。103は深鉢の破片である。燃糸が施されている。雲母がめだつ。104は地文に縄文を持つ。U字状の区画内を半隆起線のみたしている。雲母が含まれる。105は全面に縄文が施されている。雲母が含まれる。このほか10点ほどの破片が出土している。

3 柱穴と出土遺物 (第1図・第3~第6図・第11図・第17図、挿図4)

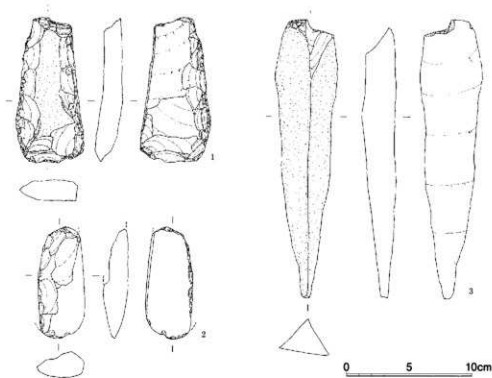
60か所検出したが、耕作に伴うものも含まれている可能性は残る。規則性は確認できなかったが、K・Lの15・16周辺から検出されたものが多い。遺物が出土した柱穴を中心に記述する。

P23 (第4図・第11図101)

K13で検出した。径27cm、深さは9cmほどである。柱穴内から101が出土している。無文の浅鉢で、全体の1/4ほど残存している。口径は31cmほどに復元できる。器壁は厚く、細かな石粒を多く含む。このほか、縄文を施された深鉢片も出土している。

P25 (第4図・挿図4-1~3、写真6・7・33)

J13で検出した。長さ27cm、幅20cm、深さ8cmほどの大きさである。断面三角状の長い剥片の剥離面の上に打製



挿図4 P25出土石器

石斧と磨製石斧が重なり、並んで出土している。土器は出土していない。意味ありげだが類例にあたる余裕がなかった。

1は打製石斧で、長さ11.6cm、幅5.4cm、153g。頁岩製。2は磨製石斧で、破損した部分に打撃を加えて形を整えている。敲打後、研磨しているがさほど丁寧ではない。小形の磨製石斧として再生しようとしたものと思われる。長さ8.1cm、幅3.8cm、91g。曹長岩石（アルビタイト）製。3は一度の打撃で剥離させた長い薄片である。長さ22.2cm、幅5cm、206g。砂質泥岩製。

P27（第4図・第17図36）

K12で検出した。径19cm、深さ14cmほどの大きさである。36の石皿が1点出土している。上半部の破片である。図の中央の皿面から右の縁にかけて熱を受けて薄黒くなっている。長さ8.0cm、幅16.0cm、863g。安山岩製。

P31（第4図・第11図102）

J13で検出した。長さ25cm、幅22cm、深さ18cmほどの大きさである。102は全体に撫糸文が施されている。ほかに10点ほどの土器片が出土している。

P37（第4図・写真11）

K15で検出した。径10cm、深さ29cmほどになる。細長い柱穴で下部がいくぶん広がる。柱穴内には炭化物が多く含まれ、ドングリ類（コナラと思われる）の実も含まれていた。

P38（第4図、第17図37）

L15で検出した。長さ25cm、幅20cm、深さ21cmほどの大きさである。37の敲石が1点出土している。川原石を利用してようである。図の左側面につぶれた痕が集中している。長さ8.8cm、幅6.9cm、379g。花崗岩製

このほかP20（第6図）から白い石粒を多く赤みをおびた土器片（隆帯を持つ、縄文なし：越後方面の土器か）が、まとめて出土しているがもろく固化（復元）できなかった。P24（第4図）、P31（第4図）からも同様な土器が10点ほど出土している。

まとめてみると、SK1の東側の柱穴から出土している遺物がめだつ。

4 溝（第2図・写真10・16）

(1) SD1 L17の東南隅からM19方向への傾斜にそって伸びている。南端はSB2と接し一部重なる。SB2の壁を壊しており、SB2より新しいものと判断した。しかし互いの覆土は似かよっており、さほどの時間差はないと思われる。確認できた範囲で6.4mほどの長さになる。幅は広いところで1.3mあるが一定していない。深さも15cmほどのところが多いが、最も深い部分は40cmほどになる。L17の検出面とM19の末端部との比高は70cmほどある。自然の流れによって形成された可能性もある。

(2) 出土遺物（第11図94～98・107、第17図34）

出土した土器の量は1.3kgほどになる。94は竹管状工具によって引かれた垂下する直線や曲線で文様を構成する。左の二本の直線（沈線）間は、竹管状工具によって引かれた右下がりの沈線でみだされる。雲母が含まれる。95は竹管状工具によって引かれた直線が垂下する。円盤状の底部の周りに粘土を重ねていった様子が観察できる。雲母が含まれる。ともに縄文をもたない土器である。96は波状の突起を持つ。口縁部下の竹管状工具によって引かれた横方向の直線の下は、垂下する沈線がならぶ。沈線は浅い。97は貫通する円文と格子目文を持つ土器である。突起の内面は円文の下部を囲むように沈線が施される。縄文はみられない。雲母が含まれる。98は竹管状工具によって引かれた直線が交差するほど密に施される。細かな石粒が多く含まれる。

土製円盤（第11図107）

107は撫糸文の土器片の周囲をていねいに整えている。雲母を含む。

石器（第17図34）

石器類の出土はごくわずかであった。34は敲石である。川原石を利用して。側面のほぼ全周につぶれ痕が観察できる。長さ9.4cm、幅4.5cm、147g。硬砂岩製。ほかに磨石1点が出土している。ほぼ長方形の安山岩の表裏がすられて平らになっている。

5 遺構外出土の遺物 (第12図～第18図)

(1) 縄文時代中期の土器 (第12図～第15図)

遺構外から出土した土器は重量にして22.2kgほどになる。全体の97.8%はL18・19、M18・19のグリットに集中している。この部分はSB1・SB2・SD1と重なる部分で、それぞれの遺構が確認できるまでは遺構外出土遺物として取り上げたことも関係する。取り上げの際、土器集中区として一括したものが相当量ある。

この4グリット(土器集中区)以外からは487g出土したのみである。土器は、摩滅しているものが目立った。包含層が薄く耕作等の影響を受けているためかと思われる。

I 縄文を持つ土器

隆帯を持った土器 (110・170)

110はM19から出土している。全体に縄文が施され、口縁部下に一条の隆帯がまわる。隆帯上には、竹管状の工具の外側を押圧してほみを連続させている。口唇部も同様な工具で押圧しほみを連続させている。雲母が含まれる。170はM19から出土している。地文は燃糸文で縦・横、直行するかのよう施文している。雲母がめだつ。隆帯と半隆起線で文様構成する土器 (116)

116はL18から出土している。キャリバー型をしている。口縁部直下の狭い範囲に縄文を施す。横方向の二本の隆帯の間はU字状に区画され、内部は深めの短沈線で満される。空白帯をはさみ隆帯が巡る。少量の雲母が含まれる。赤みを帯びた焼き上がりになっている。

隆帯と沈線で文様構成する土器 (111)

111はM18から出土している。波状の小突起を持ち、突起部に三角状に浅くくりぬいた文様を施している。口縁部にそって内側が厚くなっている。胴部には横方向の沈線が可|かれ交互刺突が施されている。雲母が含まれる。隆帯上や半隆起線上にC字状の刺突を連続施文する土器 (120)

120はL19から出土している。キャリバー型をした土器の口縁部である。口縁部直下に竹管状工具で短い沈線(半隆起線)を連続させる。その後、口縁部直下に横方向の沈線を施す。これと前後して工具の先端で半隆起線の下にC字状の沈線を連続させている。雲母が含まれる。

半隆起線で文様構成する土器 (130・131・141・155・171)

130・131はともに土器集中区から出土している。胎土に白い粒が含まれる。141は土器集中区から出土している。肥厚した口縁部に縄文が施され、U字状の区画内を短い半隆起線でうめる。雲母を含む。155はM19から出土している。縄文は一部で確認できるのみ。焼成が良く硬い。雲母を含む。171は土器集中区から出土している。補修孔とおもわれる孔が外側からあけられている。雲母がめだつ。

半隆起線と沈線で文様構成する土器 (129・136)

ともに土器集中区から出土している。半隆起線内に施文された縄文に垂下する細い沈線を施す。129からは口縁部の半隆起線が可|かれた後、縄文が施文され、沈線で区画されたという順序がわかる。雲母がめだつ。136は蓮華状文をかたどったようで、沈線下部を三角状に削り取っている。白い粒が含まれる。

平行沈線で文様構成する土器 (133・134・172)

ともに土器集中区から出土している。133は胎土に雲母が含まれる。134は胎土に雲母が多く含まれる。172はM19から出土している。口縁部を内側に折り返している。雲母を含む。

平行沈線と刺突で文様構成する土器 (135)

土器集中区から出土している。並行沈線の脇に細かな刺突が施されている。雲母を含む。

沈線で文様構成する土器 (166・169)

166はM19から出土している。沈線の間を削り三叉文を作り出している。雲母が含まれる。

169はM19から出土している。沈線の重なる部分もみえるので一度に施文したものではない。地文は燃糸文である。雲母を含む。

沈線と刺突で文様構成する土器 (151・152・158・164)

151・152はL18・M18の土器集中区から出土している。沈線で直線や曲線をえがく(沈線の中には竹管状工具に

よって引かれた平行沈線が混じっているかも知れない。沈線間の器面に、先端の丸い工具（中空の細い管か）で小さな刺突を縦・横に連続して施す。雲母がめだつ。同一個体かもしれない。164はM18から出土している。151・152と沈線間の刺突の状況や胎土が類似する。同一個体かもしれない。158はM18から出土している。口縁部下に刺突を5列連続させる。左から右方向に施文しているようである。胴部の刺突は沈線内に施文している。雲母がめだつ。

折り返し口縁を持つ土器 (137)

137は土器集中区I層からの出土。雲母を含む。

捻糸文をもつ土器 (138・139)

138・139は土器集中区 から出土している。138は捻糸施文のあと、部分的に縄文を施文する。雲母を含む。139は雲母がめだつ。

縄文のみの土器 (173・176)

173は土器集中区から出土している。施文後に表面をなでたのか、中央付近に指先ほどの幅で縄文の不鮮明な部分がある。176は土器集中区から出土している。表面はていねいになでられている。縄文は密に施文したものではないようである。色調や胎土は175によく似る。同一個体かもしれない。

II 縄文を持たない土器

隆帯と半隆起線で文様構成する土器 (117・144・160)

117はM18から出土している。キャリバー型をし、波状の取っ手を持つ。取っ手につく円形の隆帯は内外面とも中央がくぼんでいる。口縁直下には取っ手の円形の隆帯まで沈線が引かれている。半隆起線と下の隆帯の間は、三角状に削り取られる個所がいくつかみられる。逆ハート形や「逆の」の字形に粘土の貼りつけもある。隆帯下にも半隆起線がめぐる。白みを帯びた焼き上がりとなっている。144は隆帯脇に半隆起線が引かれる。半隆起線の脇に刺突を連続して施す部分がある。雲母を含む。160はM18から出土している。白い粒や酸化した安山岩の粒が含まれる。半隆起線の間に短い沈線が交互刺突状に施される。

隆帯（半隆起線）上にC字状の刺突を連続施文する土器 (114・118・119・143・163)

114はM19から出土している。口唇の内側と外側にC字状の刻みが連続する。口縁部下の隆帯上にも同様に施文される。上部の隆帯間は、（垂下する）短沈線で満たされる。下部の隆帯間は竹管状工具によってU字状に区画された内部を短沈線で満たされる。118はL18とM18の境付近から出土している。口唇部にC字状の刻みが連続する。口縁部下の隆帯上にも同様に施文される。上部の隆帯間は、竹管状工具によって施された短沈線で満たされる。隆帯上の半円状の隆起をはさんで胴部に垂下する沈線もみられる。隆帯下の半隆起線状には交互刺突が施されている部分もある。雲母が含まれる。赤みを帯びた焼き上がりとなっている。119はM18のI層から出土している。口唇部にC字状の刺突を連続して（連続爪型文）施している。その後、横方向に竹管状工具による平行沈線（半隆起線）が引かれる。横位の無文帯をはさんで頭部に施されたC字状の刺突は、半隆起線が引かれた後に施される。口唇部も竹管状工具によってなでられているようである。白みを帯びた焼き上がりとなり軽い。北陸系の土器と思われる。143は土器集中区から出土している。口唇部に深い沈線が引かれ、断面がU字状になっている。肥厚した口縁部と無文帯ををばさんだ使途の隆帯上にC字状施文が連続する。色調は白橙で他と異なる。163は土器集中区から出土している。肥厚した口唇部と隆帯上にC字状の刻みが連続する。口唇部と隆帯の間は短い半隆起線が並ぶ。雲母が含まれる。

隆帯と平行沈線で文様構成する土器 (147)

147は土器集中区から出土している。口縁部の内側が折り返し口縁状になる。雲母がめだつ。

平行沈線と沈線脇の刺突で文様を構成する一群 (112・113・115)

112はL18から出土している。波状の小突起を持つ。口縁部内側が厚くなっている。小突起部と口縁部下に竹管状工具によって平行する沈線が引かれている。平行する沈線の下に沈線をはさんで、刺突が上下に連続して施されている。雲母が含まれる。113はL18とM18の境付近で出土している。波状の小突起を持つ。口縁部内側が厚くなっている。小突起部の沈線が三本施される。口縁部下は竹管状工具によって平行沈線が引かれている。この部位は沈

線下に刺突が連続する。空白部をはさんで、一本の沈線が引かれ、その上部（下部にもあるか）に刺突が連続して施されている。雲母がめだつ。115はM19から出土している。口唇部に刻みが施され、口線下に細い沈線が引かれている。空白部をはさんで、一本の沈線が引かれ、その上部に刺突が連続して施されている。雲母がめだつ。

平行沈線で文様構成する土器（148・174）

148は土器集中区から出土している。雲母がめだつ。174はM19から出土している。横と縦方向の平行沈線（器面が摩滅しているためか、竹管状工具によって引かれた盛り上がりが高いので平行沈線とした）でうめっている。白い粒や細かな石粒が多く含まれる。波状の口線になるかもしれない。

半隆起線で文様構成する土器（132・140・142・153・159・167）

132は土器集中区から出土している。（低めの）半隆起線で曲線が引かれる。140は土器集中区から出土している。口線部下に、斜行ぎみの短い半隆起線が並ぶ。上下の沈線はその後に引かれている。雲母を含む。142は土器集中区から出土している。斜行する沈線（半隆起線）を引いた後、横方向の半隆起線を引いている。頸部は無文帯になるようである。153は土器集中区から出土している。口線部が無文帯になる。その下に短い半隆起線が並ぶ。横方向の3本の半隆起線をはさんで、再び短い半隆起線が並ぶ。雲母を含む。159はM18から出土している。施文順序は142と同じ。雲母がめだつ。167はM19から出土している。半隆起線で引かれたU字状文が並ぶようである。

半隆起線と刺突で文様構成する土器（122・154・161）

122はL18とM18の境付近のI層から出土している。頸部付近の破片で、半隆起線と隆帯、空白帯によって構成される。半隆起線の上部に間隔をあけて刺突されている部分や、隆帯の上下を交互に刺突、あるいは押さえている部分がある。雲母が含まれる。154は土器集中区から出土している。口唇部も半切した竹管状工具でなでているようである。下の半隆起線との狭い間を上段と下段に（交互刺突状に）刺突している。上段、下段ともに口線部方向からの刺突である。雲母を含む。161はM19から出土している。二本の半隆起線が巴状に引く。この間の空間に刺突（沈線かも）を施している。胎土は細かく色調は白っぽい。少量の雲母を含む。北陸系の土器を思わせる。

半隆起線と沈線で文様構成する土器（168）

168はM19から出土している。半隆起線内の区画が格子目状になっている。縦方向の平行沈線が引かれた後、横方向の沈線が引かれる。

沈線で文様構成する土器（145・146・149・156・162）

145は土器集中区から出土している。沈線で格子目状の文様をつくる。縦方向の後、横方向の沈線を引く。雲母を含む。146は土器集中区から出土している。沈線で交互刺突状の文様をつくりだしている部分もある。雲母を含む。149は土器集中区から出土している。粘土塊を貼り付け、半円状に整えたのちに4条の沈線を引いている。雲母がめだつ。156は土器集中区から出土している。幅広の工具によって左から右方向に波状の沈線を施文している。162は土器集中区から出土している。口線部から無文帯となる。円形をした粘土を貼り付け、中央に短い沈線を引いている。

沈線と刺突で文様構成する土器（150・165）

150は土器集中区から出土している。交互刺突状の施文や、先が細くて丸い工具による横方向の刺突などが小破片の全面に施されている。雲母を含む。165はM19から出土している。沈線下の空間に交互刺突状に上・下段に刺突が連続する。上段は下方向から、下段は上方向から施文される。

指頭爪痕を持つ土器（125・126・157）

ともに土器集中区から出土している。125・157はI層からの出土。ともに白い粒や細かな石粒が多く含まれる。157は表面に爪痕状のものもみえる。

口線部に突起を持つ（121・175）

121はM19から出土している。口線部が外反する深鉢で、小突起を持つ。175は土器集中区から出土している。口線部の突起が特徴的である。粘土紐を3本並べて貼り付け、指を折ったような突起になる。表面はていねいになでられ、雲母がめだつ。色調は赤みをおび焼成もよい。176と同一個体になるかもしれない。

無文土器の一群（123・124・127・128）

123はM19から出土している。大型の深鉢である。口縁部がいくぶん内傾する。土器の内側には指頭の圧痕も残る。口唇部も平らに整えておらず、ていねいさに欠く。雲母が含まれる。124はM19から出土している。色調や風化の度合いは121に似る。白い粒や細かな石粒が多く含まれる。127はL19から、128はM19から出土している。128は白い粒や細かな石粒が多く含まれる

(1) 土偶 (第15図4～8・写真25・26)

6点出土している。図化したのは5点である。4はM18から出土している。足(かかと?)の破片である。細い沈線が4条めぐっているのが確認できる。底は平らに整えられている。上部の破損面に、串状の工具でつけられたような3つの穴が並ぶのがみえる。深いものは7mmほどある。上にのる粘土塊との接合に係るものかもしれない。雲母が含まれる。5はL18から出土している。胴部の破片である。下に向かって広がり、底が平らなこともあり自立する。腹部に幅25mmほどの沈線が上から下へと引かれる。正中線を表現しているのものと思われる。底は縁の内側が押さえにより整えられて、上げ底気味になっている。脚部は初めから表現されていない。6はM19から出土している。肩から右腕にかけての破片である。腕の先は四角に整えられている。表側の腕には細い沈線が引かれ、その中に上下からの交互の刺突が施される。背の部分は、首に近い部分から腕の上部にかけて竹管状工具によって縦やL状の沈線が引かれている。腕の下部からわき腹にかけても細い沈線が引かれている。雲母を含むことや赤茶けた色あいは4と似る。7はL18から出土している。5の土偶と重なるような状態で出土している。胴部の破片である。下に向かって広がり、底が平らなこともあり自立する。腹部には径6mmほどの臍(へそ)が表現される。臍の左上部から、下の方向に幅3mmほどの沈線が引かれる。5と同様に初めから脚部は表現されていない。整形方法、胎土とも5に酷似する。8はM18から出土している。脚部の破片である。断面に串状の工具による穴(あるいは痕跡)が残る。深さは1.6cmほどである。酸化した安山岩の赤い粒が多く含まれる。

上赤塩遺跡からは、永野楠雄氏の表採したものが2点、1995年の調査で13点(小柳1997)の土偶が出土していた。今回の調査出土した9点(SB2:3点、遺構外6点)を加え、計24点となる。

土製円盤(第11図108・109)

108はM19から出土している。無文部の土器片を利用して、周囲をていねいに整えている。雲母を含む。109はM18から出土している。ミニチュア土器の底部を利用して。雲母を含む。

(2) 石器 (第16図～第18図)

石鎌(第16図16～18)

石鎌は4点出土している。黒曜石製3点、頁岩製1点である。16はL16から出土している。長さ2.3cm、幅1.5cm、1.3g。黒曜石製。17はM18から出土している。長さ1.8cm、幅1.3cm、0.5g。黒曜石製。18はM17から出土している。長さ1.7cm、幅1.4cm、0.3g。黒曜石製。

打製石斧(第16図19～21)

9点の打製石斧が出土している。石材の多くは頁岩系(砂質泥岩・泥岩)の岩石を利用している。片面あるいは両面に自然面を残す個体が多い。19はM19から出土している。長さ10.3cm、幅4.9cm、102g。細粒砂岩(頁岩)製。20はM19から出土している。長さ11.8cm、幅4.6cm、70g。細粒砂岩(頁岩)製。21はM18から出土している。長さ9.1cm、幅4.4cm、71g。細粒砂岩(頁岩)製。

横刃型石器(第16図22)

横刃型石器は2点出土している。22はM18で出土。長さ6.0cm、幅8.2cm、54g。頁岩製。

磨製石斧(第17図38)

磨製石斧は2点出土している。図示した石斧は、L18から出土した。全体によく研磨されているが、表面に異物が付着している。長さ9cm、幅4.8cm、113g。花崗斑岩製。

敲石(第16図23・24、第18図45～47)

敲石は22点出土している。石材は頁岩2点、硬砂岩1点、砂岩15点、泥岩1点、安山岩3点となり砂岩製のものが中心である。大形のもの、端部にわずかなつぶれやすれがみられるものが多い。小形のもの、端部も平らになるほどのつぶれをもち、中にはほぼ全周につぶれがみられるものもある。23は土器集積区から出土している。割れ

た川原石を利用している。破断面を除き全周に剥離がみられる。長さ5.2cm、幅5.7cm、63g。砂岩製。24も土器集中区から出土している。円形の平らな石を利用している。全周に剥離がみられる。長さ5.0cm、幅4.2cm、40g。頁岩製。45はM18から出土している。一端を欠く。残った端部は、使用によるものと思われるつぶれが明瞭に観察できる。図の左側面にのみわずかなつぶれがみられる。長さ9.1cm、重量88g。硬砂岩製。46は土器集中区から出土している。縦長の川原石を利用している。両端に剥離がみられる。図の下端部には使用によるものと思われるつぶれが明瞭に観察できる。長さ7.7cm、幅3.2cm、65g。頁岩製。47はM18のI層から出土している。ほぼ円形をしており全周に剥離やつぶれがみられる。長さ5.8cm、幅5.1cm、62g。砂岩製。

石皿（第17図40、第18図41、写真4・5・32・33）

石皿は13点出土している。1点斑レイ岩製のものがあるが、他はすべて安山岩製である。多くは小破片で、全体の形のつかめるものは少ない。40は大きめの石皿の破片である。M18のI層から出土している。縁から中央に向かって滑らかに整形されている。裏面も平面をなすように丁寧に整形されている。図の左側面に焼けた痕跡がみられる。安山岩製。長さ17.6cm、幅15cm、25kg。

41は刻文付石皿である。L19から出土している。位置的にはSB2と重なるが、遺構を確認する前の段階で出土しているため遺構外出土遺物とした。皿面を下にして出土している。石皿は上半部が残存している。全面が整形され、皿部が作り出されている。皿部は中央部に向かって滑らかに湾曲している。側面全体に、4つの渦巻紋とそれを仕切るかのような直線が刻まれる（陰刻）。全体の文様がつかめる2つの向き合う渦巻紋は回転方向が異なっている。裏面は、中央部がややくぼむように整形され、縁に沿うかのようにくぼみが連続する。石質は安山岩。長さ13.8cm、幅15.8cm、1.42kg。

上條信彦の研究によれば、北信での出土例は、千曲市屋代遺跡、長野市松原遺跡（2点）、山ノ内町宇木丸山遺跡、小川村後遺跡で計5点出土しているのみである。上條は「刻文付石皿は集落あるいは住居址群単位で、一点ずつという規則性」があり、「刻文付石皿が単なる装飾だけの意味ではなく、集落内における所有において大きな意味があった」こと、「住居址群を構成する集団と集団が行う共同祭祀との関連」などを指摘している（上條2006）。早くから注目され、発掘調査も行われてきた本遺跡でも初の出土例である。

凹石（第18図42～44）

凹石は10点出土している。9点が安山岩製、1点は石英安山岩製である。42は蜂巣石とも称されるもので、多数のくぼみを有する。L19から出土している。縁沿いに径3～3.5cm、深さ1cm前後のくぼみが連続する。中央部のくぼみは浅い。表面はていねいに整形されており、石皿としても使用された可能性がある。長さ27.1cm、幅25.8cm、5.6kg。安山岩製。43はJ13から出土している。両面に各1か所のくぼみがある。自然石を利用している。長さ8.5cm、幅6.1cm、427g。安山岩製。44はN12から出土している。両面に各2か所のくぼみがある。自然石を利用している。長さ11.7cm、幅8cm、480g。安山岩製。

砥石（第17図39）

砥石が1点出土している。39は土器集中区から出土している。欠損部を除き全面にすり跡が残る。砂岩製で砥石としたものと思われ、すり面は中央がくぼむ程度使用されている。長さ8.5cm、218g。

D まとめ

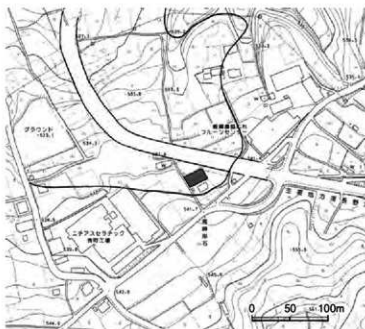
平成7年（1995）の県道拉幅に伴う調査（小柳1997）と調査区を重ねたのが第7図である。

1995年には、遺跡内を通過している県道の拉幅に際して発掘調査が実施され13棟の住居跡等が出土した。調査者は「限られた調査範囲であったが、遺跡の中央部をほぼ横断するトレンチを掘った形になった。遺構の分布をみると13軒の住居址は東西に分かれ、その内側に土坑群が分布し、さらに内側は遺構も遺物もみられない区域となる」。「住居が台地の周縁部にそって弧状に分布し、その内側に土坑群が分布し、中央部に広場を持つかなり規模の大きな集落の存在が予想される」と指摘したが、今回の調査でも同様な結果が示された。

2 表町遺跡 (挿図1-2)

A 概要

所在地	飯綱町大字牟礼字中島 825-1番地 北緯 36° 74' 50" 東経138° 23' 78"
原因	個人住宅建設
調査方法	試掘調査
調査期間	令和元年5月23日
調査面積	2.6㎡
出土遺構	畝状遺構4条、土坑状遺構1
遺物	土師器3点(1点内耳鍋か)、 カワラケ1点、 磁器2点(1点近世)



挿図5 表町遺跡 範囲と調査地

B 調査の経緯と遺跡の概要

(挿図5・6)

調査地は文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)」にあたる表町遺跡(62)に該当する。ここに1.9m四方、深さ2.2m程の掘削を伴う浄化槽設置工事が計画され発掘届が提出された。

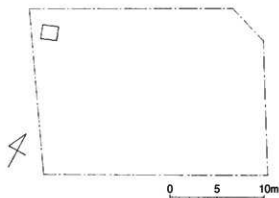
表町遺跡は三登山の北麓斜面に立地し、遺跡のすぐ北に接して、矢筒城・矢筒城館跡がある。城の表(南)に広がる集落があったのが地名の由来と伝えられる。

遺跡の中央部を斜行するように通過する長野荒瀬原線(四ツ屋バイパス)建設に伴う発掘調査が平成17年～19年にかけて実施されている。調査では伝承どおり、約500年前(戦国時代)の集落跡が確認された。集落内の井戸跡からは、手馬鋸、白、そりなど戦国時代の木製品が出土している。ほかにも平安時代の集落跡や縄文時代早期・前期・後期にわたる陥し穴が確認された。縄文時代後期の陥し穴は、細長い溝状で、列をなして並んでおり、中には100m以上続いているものもあった(中野2009)。北西部でも、同バイパスより飯綱病院へつながる町道建設に伴う調査で、掘立柱建物、井戸跡等の遺構や輸入陶磁器(青磁、白磁、青白磁の梅瓶・水注、青花、天目)、茶臼、石臼、戦国時代の板碑や五輪塔等多くの遺物が出土している(笹澤・原田2014)。

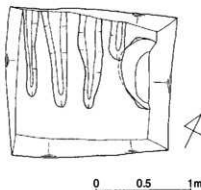
調査地は、長野荒瀬原線(四ツ屋バイパス)建設に伴い発掘調査された地点と隣接する地であり、遺跡の広がりを確認する上で重要な地点である。

C 調査結果 (挿図7・写真34～36)

調査地は道路面より低地のため、路面の高さまで土が盛られていた(80cm程)。重機で対象範囲全体を掘り下げ、IV層上部から



挿図6 表町遺跡 調査位置図



挿図7 表町遺跡 遺構図

は手掘りで掘り下げた。

層序はⅠ（盛土）(80cm程)、Ⅱ層（表土・耕作土）(10～15cm)、Ⅲ層（暗褐色土層：7.5YR3/1）(15～25cm)、Ⅳ層（黄色ロームブロックを含む暗褐色土層）(20cm程)、Ⅴ層（明褐色粘質土（ローム層）：7.5YR5/6）となっている。

1 出土遺構と遺物（挿図7）

Ⅴ層表面で、北北西方向にのびる4条の畝状の落ち込みと土坑状の落ち込みを検出した。

畝状遺構 畝状の落ち込みは西からSD1～SD4とした。SD1は、長さ90cm（幅10～15cm、深さ2～4cm）ほど、SD2は、長さ100cm（幅15～25cm、深さ3～5cm）ほど、SD3は、長さ100cm（幅15～25cm、深さ2～5cm）ほど、SD4は、長さ40cm（幅15～17cm、深さ3～4cm）ほどの部分が検出されている。SK1を切っている。SD4からは、土師器と思われる小片が出土しているが、摩滅が激しく時期は確認できない。

土坑状遺構（SK1） 調査範囲の東端で径70cm程の黒色土（7.7YR1.7/1）の落ち込みを確認した。40cm程掘りこんだが、地表から深くなり調査範囲も狭いため下部への掘り込みは中止した。

2 遺構外出土遺物

Ⅲ層から、カワラケ1点、近世の染付茶碗（磁器）1点が出土している。Ⅳ層からは、内耳鍋（？）1点、土師器1点、磁器1点が出土している。いずれも小片で図化できない。

D 調査の成果

ごく狭い範囲の調査であったが、調査地周辺に耕作地（畑）が広がっていたことを思わせる畝状の遺構を検出できた。これまで大規模に発掘された表町遺跡の調査（中野2009、笹澤2014）では明瞭でなかった、耕作地の痕跡を確認できたことは大きな成果であった。

3 八蛇口遺跡（挿図1-3）

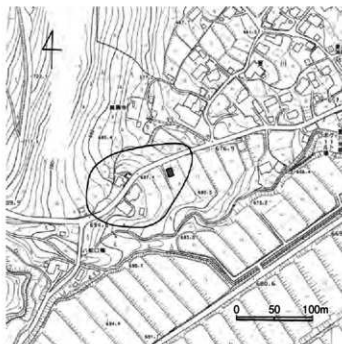
A 概要

所在地	飯綱町大字川上字八蛇口806-1番地 北緯 36° 73' 20" 東経138° 20' 16"
原因	防火水槽整備
調査方法	発掘調査
調査期間	令和元年6月21日～7月8日
調査面積	約98㎡
出土遺構	土坑8基、柱穴列
遺物	縄文土器（草創期・早期・前期）、 石鏃、石匙、石皿、 眼鏡レンズほか

B 調査の経緯と遺跡の概要（挿図8）

調査地は文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）」にあたる八蛇口遺跡（25）に含まれる。当該地域の防火水槽整備が計画され、発掘届が提出された。

八蛇口遺跡は、飯綱山東山麓の傾斜面にあって、夏川集落の南西端に位置し、南方50m先には1級河川の八蛇川が流れる。遺跡内からは縄文土器と土師器が採集されていたが、建設予定地およびその周辺において発掘調査が実施されておらず、遺



挿図8 八蛇口遺跡の範囲と調査地

跡の実態が不明のため発掘調査に先立って試掘調査を実施することとした。

C 調査結果 (第19図・第20図、挿図9-14、写真37-52)

工事は、長さ約13m、幅約8mの長方形の敷地に、深さ約4mを掘削し、防火水槽を埋設する予定であった。遺跡の概要を把握するため敷地内に、斜面に沿って2本のトレンチを設定した(T1・T2)。重機によって順次削平していったところ、表土下わずかで柱穴状の落ち込み(以下柱穴)が列をなすように検出された。このため、全面発掘を実施することとした。

グリットの設定は、鞆共栄測量設計社に委託した。

層序はI層(表土・黒色土:10YR2/1)(20~30cm)、II層(黒褐色土層:10YR3/2)(10~20cm)、III層(黄色粘質土層:ローム層)となる。

1 出土遺構と遺物

(1) 柱穴列と出土遺物 (第19図・第20図、挿図9、写真37-52)

柱穴列はII層表面でI層の落ち込みとして検出された。調査範囲内で6列確認できた。1列に最大14並ぶ。柱穴はさらに調査範囲外に広がる様子がうかがえる。

柱穴は長さ50cm、幅30cm前後の長方形を呈するものが多く、深さは15cm~20cmである。一つ一つの柱穴は、さほど丁寧に掘られたものではないようにみえる。

1列目(西側から順に1列~6列とした)はP1~P11(柱穴間の芯々9.0m)、2列目はP12~P25(芯々12.0m)、3列目はP26~P37(芯々11.3m)、4列目はP38~P50(芯々11.2m)、5列目はP51~P62(芯々11.3m)、6列目はP63~P73(芯々9.4m)の柱穴が確認できた。各列間は芯々が、ほぼ1.5mとなっている。

各列の柱穴の状況を観察すると、2・3列、4・5列が対をなすようにみえる。2・3列間は、P12とP26の対応からはじまり、P24とP37までが対応する。ほぼ列間の芯々が1.5m、柱間の芯々が1mとなっている。P18と対をなす柱穴はみられないが、P31とP32間の大きな岩を利用したものと思われる。岩の頂は、P31・32の検出面より25cmほど高い。P31・32の柱穴の深さは15cm前後なので、柱(支柱)の長さは40cm前後と想定される。

4・5列間は、P38とP51の対応からはじまり、P50とP62までが対応する。ほぼ列間の芯々が1.5m、柱間の芯々が1mとなっている。ただし2・3列間ほどきちんと対応していない。

山麓の東下がりの斜面に位置するため、調査地の西北端(B5)と南端(F16)間の標高差は4cm(距離12.5m)、東北端(I2)と南東端(M13)の標高差は1cm(距離12.8m)とほぼ等高線上にある。一方、西北端(B5)と東北端(I2)間の標高差は69cm(距離7.9m)、南端(F16)と南東端(M13)間の標高差は74cm(距離7.6m)あり、5°~6°の傾斜をなしている。

ここに、一枚の平坦面を設けるのは(赤べとの重量もあり)困難であろう。おそらく、いくつかの段差を設けたものと思われる。

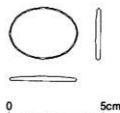
柱穴内出土遺物(挿図9、写真41・52) 柱穴の構築された時代を特定すべく柱穴内を丁寧に掘り進めたが、出土した遺物はわずかであった。

眼鏡レンズ P68内から出土している。P68はJ6グリット内に位置する。検出面では長さ50cm、幅30cmほどの長方形に近い形をしていた。深さは20cmほどある。表面から10cmほど下の覆土内から出土した。透明ガラス製で長さ3.60cm、幅2.75cmの楕円形をしている。重さ42g。レンズの縁は両面から研磨したようで薄くなる。厚さは両端1.8mm、中央部2.2mm。わずかに凸レンズ状になっており、文字を拡大してみることができる。

その他、P58から薄い鉄片(缶類か)が、P14から鉄釘が出土し、P34、P56からは近現代の陶器片が出土している。

柱穴群は「赤べと」を集積した施設

列をなして並ぶ柱穴の前に、その性格を判断するのに迷っていたが、調査の見学にみえた夏川の住民(大内武司氏、石井賢郎氏)から、戦中、飯縄山の東山麓で



挿図9 P68出土眼鏡レンズ

探掘した赤ベト(褐鉄鉱)を調査地点付近に(一時的に)置いていたという証言が得られた。

飯綱町内の褐鉄鉱(以下、赤ベト)探掘の実態を記録したものは少ないが、『牟礼村誌』には、「高岡村(現飯綱町)の大谷地付近から褐鉄鉱、通称「赤ベト」の探掘が村をあげて行われ、牟礼駅まで極(そり)や車によって運び出され、時ならぬ鉱山地帯と化し、掘り取られた現地は山容が一変するほどの活況を呈した」と記されている。

昭和19年(6月)には、東京高等師範学校の教官・生徒18名が赤ベトの調査発掘勤勞奉仕に動員され、西黒川の西園寺に宿泊した。1か月余り滞りて7月28日東京に引きあげたが、そのさい残した手記(『東京高等師範学校勤勞奉仕隊終結記』)に、「赤ベト 今日五里 昨日七里の山歩き 果れ果てたる 大山師かな」という落首がみられる(青山1997)。

また、夏川集落の北東1.2kmほどに位置する中宿の区誌には「昭和18年から19年ころまで、土着鉱業により褐鉄鉱(通称「赤ベト」)の探掘が行われていた。探掘された赤ベトは、中宿地籍を馬ソリで搬出し牟礼駅まで運ばれた。」[昭和19年の牟礼駅勢要覧によると、年間700トンの赤ベトの輸送があった]と記述されている(中宿区誌編纂委2005)。

現地は飯綱山麓の山中から集落に出た最初の地点で、傾斜もゆるくなり、ある程度の面積を確保できるので赤ベトをいったん集積する場所として選ばれたものであろう。

柱穴内の埋土からも、缶詰の容器とわれる破片や眼鏡レンズが出土していることと合わせ、赤ベト置き場に関連したものと判断するにいたった。床状の施設を支える柱穴であったものと思われる。

(2) 土坑と出土遺物(第19図、挿図10・11・13、写真43・44・47・48・50・51・52)

土坑は8基確認された。多くは縄文時代早期から前期に属するものと思われる。

SK1

調査地の西壁際(D12)のⅢ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。楕円に近い形をしているが、一部調査範囲外に広がる。覆土内および土坑の東壁を切ってP5が掘りこまれている。大きさは確認できる範囲で長径80cm、短径40cmになる。深さは12cm程と浅い。遺物は検出されなかった。

SK2(挿図13-1・2)

中央西寄りの大きな石の南脇(G11)のⅢ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。石の周りを精査して確認したものである。楕円に近い形をしており長径90cm、短径60cmほどの大きさである。深さは15cm程と浅い。遺物は検出面で縄文前期の土器が出土している。口縁部や隆帯上の刺突、竹管状の工具による連続する刺突(C字状)が施されている。2には雲母が含まれている。

SK3(挿図13-3・4)

調査地の北壁、西寄りの大きな2つの石の間(D4)のⅢ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。覆土内にP37が掘りこまれている。楕円に近い形をしており、長径1m、短径60cmほどの大きさである。深さは45cm程ある。柱穴状の遺構かもしれない。遺物は縄文土器4点と近世の壺(磁器製)片が1点出土している。3は口縁部の破片である。表面に縄が押圧されている。草創期の押圧縄文と思われる。胎土は灰白色。幅3mmほどの石も含まれている。4は幅の狭い粘土紐が4条貼付されているのが確認できる。浮線には左下がりに連続する刻みと、下位の浮線には右下がりに連続する刻みと交互に施されている。

SK4(挿図14-1)

調査地の南側(H12)のⅢ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。近くにはSK6・SK7がある。一部がP40によって切られている。長径70cm、短径50cmほどの楕円形をしており、深さは10cmほどと浅い。遺物は石鏃が1点検出面で出土している。黒曜石製で3.4cm、幅1.2cmと細長く基部近くの両側に浅い抉りがみられる。重量1.7g。覆土内からは縄文土器と思われる小片が1点出土している。

SK5

調査地の北東側(G5)、SX1の南側のⅢ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。径90cmほどのいびつな円形をしている。西側の壁面はP47によって切られている。深さは20cmほどと浅い。遺物は検出されなかった。

SK6

調査地の南端、東寄り (J14) に位置する。Ⅲ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。西側にはSK8がある。一部範囲外にひろがるが、ほぼ全体を検出できた。長径70cmほどの楕円形をしているようである。深さは20cmほどと浅い。遺物は検出されなかった。

SK7

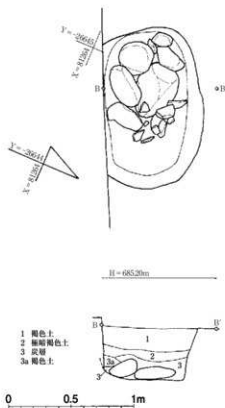
調査地の南東端付近 (K12) に位置する。Ⅲ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。西側にはSK4・SK6がある。径80cmほどの円形をしている。深さは10cmほどと浅い。遺物は山形の押型文土器の小片が出土している。

SK8 (挿図10・11・13、写真45・46・52)

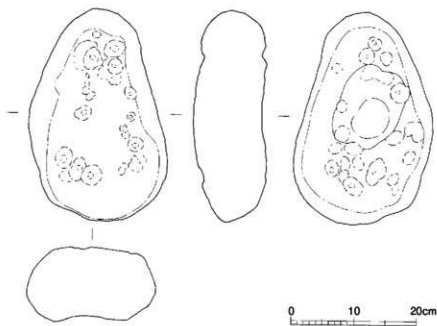
遺跡の南端、西寄り (H15) に位置する。一部範囲外にひろがるがほぼ全体を検出できた。覆土内にはP12が掘りこまれている。P12を半切して調査したさい、下部から炭がまどまって出土したため周辺を精査して確認した。およそ小判型をしている。南壁は立ち上がりを確認したが上部が調査地外となるため未検出である。規模は長径125cm×短径80cm、深さは40cmほどになる。

覆土は1層 (褐色土7.5YR4/4) 20cm前後、2層 (極暗褐色土7.5YR2/3) 8cm前後、3層 (黒色土7.5YR1.7/1) 15cm前後、3a層 (褐色土7.5YR6/6) 8cm前後となる。全体に炭が混じるが、3層は、ほぼ炭層であった。土坑の底には大きな5個の石を中心にいっくつかの石が並んでいた。

出土遺物は山形の押型文土器が中心であるが、草創期の押



挿図10 SK8 実測図



挿図11 SK8 出土石皿

縄文土器も1点混じる。すべて1層中から出土している。

押圧縄文土器 (挿図13-10)

器厚が4mmほどの薄手の土器でよく焼成され硬い。縄文の粒の中に細かな繊維の圧痕がみえる。白い石粒が含まれる。

押型土器 (挿図13-5-9)

押型土器は13点出土し、すべて山形文である。5は検出面で出土している。口縁部の破片で器形は外に開く。横方向に山形文が連続するが、中央右寄りから一段下がって施文されているようである。下部に刺突が連続するように観察されるが表面が摩滅していて明瞭でない。胎土は5-9とも共通しており、白い粒状の石や細かな石が多く含まれる。6も口縁部の破片で器形は外に開く。口唇にも山形文が施されている。7-9は体部の破片である。8は山形の条数も多く、器厚も薄い。

石器 (挿図11)

土坑の底に並んだ(据えられた)石のなかで、中央の一番大きな石に重なる石が石皿であった。皿の面を下にしており、取り上げたところで石皿と確認できた。皿面は浅く、裏面には小さな凹みがいくつかある。長さ33.8cm、幅22.0cm、9.0kg。輝石安山岩製。

SK8は、縄文時代早期の土坑であろう。炭層が土坑底部の石組を覆っており、墳墓をおもわせるが骨片は検出できなかった。

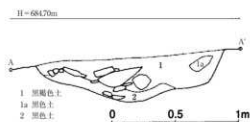
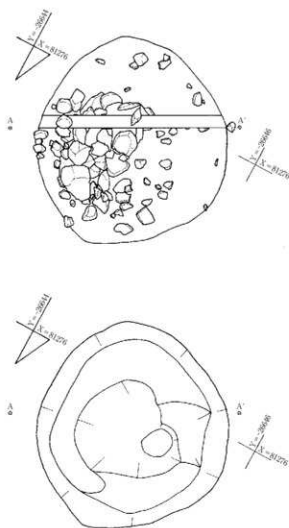
(3) 溝状遺構 (第19図、挿図13-11・12)

SD1はI9からK8グリットにかけて検出した。西南から東北方向の調査地外へと下っていく。全体で2.8mほど確認。西南端付近 (I9) では幅80cm、深さ35cm程ある、下がるにつれだいに狭まり幅40cm、深さ20cm程となる。底も凸凹している。自然の流路かもしれない。

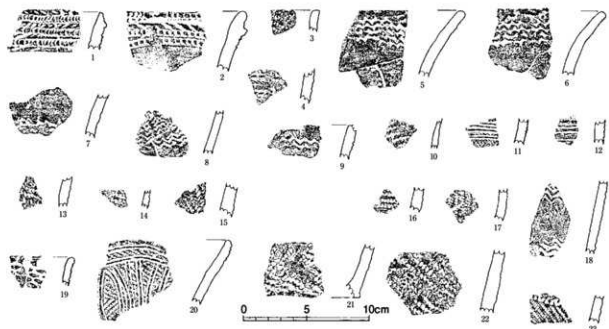
遺物 縄文土器片が3点出土している。細かい縄文の上を細い竹管状の工具を用いて平行沈線が引かれている土器がある。

(4) 性格不明の遺構 (第19図、挿図12・13-13、写真42・48)

SX1はG3・H3グリットを中心とする周囲のⅢ層表面でⅡ層の落ち込みとして検出した。ほぼ円形(径1.5m~1.65m)の落ち込みの中に、安山岩質の割られた石が多数含まれていた。石の重なり具合を見るため、中央よりやや南寄りに壁を残し掘りこんだ。中心部の深さ25~30cm程でⅢ層に達した。覆土の層序は、1層(黒褐色土層:7.5YR2/2)10~25cm、1a層(黒色土層:7.5YR1.7/1)(1層内にブロック



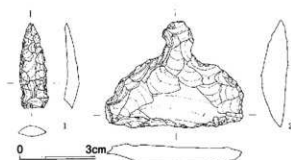
挿図12 八蛇口遺跡 SX1実測図



挿図13 八蛇口遺跡 出土土器

状に入る) 10cm前後、2層(黒色土層:7.5YR17/1) 10cm前後となる。表面に近い部分(1層)ほど多くの石が含まれていたが、並べたり組んだりした様子は観察できなかった。

遺物 縄文土器片3点、カワラケ1点、近世陶器1点。いずれも小片である。縄文土器のうち1点(13)には押縄縄文が施文されている。一段の縄Lの側面圧痕と思われる。器厚は8mmとやや厚みである。内面もていねいに整えられている。胎土に赤や白の粒が含まれる。出土したわずかな遺物も小片であり、時期もバラバラのため本遺構の性格や時期を特定することは難しい。



挿図14 八蛇口遺跡 出土石器

2 遺構外出土遺物

(1) 土器(挿図13-14~23・写真52)

① 押縄縄文土器(挿図13-14~17)

いずれも、縄の側面圧痕と思われ、Ⅱ層とⅢ層の境付近で出土している。14は器厚が5mmと薄い。内面もていねいに調整されているが黒い。白い細かな粒を含む。15は器厚が10mmある。内面もていねいに調整されている。赤みを帯びた胎土で白い粒や雲母をわずかに含む。16は器厚が7mmある。内面もていねいに調整されている。白い石粒や細かな石が多く含まれる。雲母もわずかに含まれる。17の器厚は6mm。内面もていねいに調整されている。表裏とも黒い。白い粒を含む。

② 押型土器(挿図13-18・19)

山形と楕円の押型文がある。山形押型文は7点出土している。18はG15のⅢ層表面で出土している。間をあけて上下に山形文が施文されている。裏面は全体が黒変している。19は楕円押型文の土器で1点出土している。口縁部の破片で直下から施文されている。器厚は6mmほどと薄い。白い粒が含まれる。

③ 縄文前期土器(挿図13-20~23)

20は波状口縁部である。全体に縄文を施文した後、竹管状工具によって口縁部にそった2条の曲線が引かれ、そ

の後縦方向の直線（弧線）が引かれるといった手順が観察できる。白い粒が含まれる。焼成は良好である。21～23は全体に縄文が施文されている。21は底部付近の破片である。22はG13のⅡ層内から出土している。23には羽状縄文が施されている。

(2) 石器 (挿図14-2、写真52)

2はSX1に近いG4のⅡ層下部から出土した石器である。長さ4.2cm、幅5.6cm、21g。頁岩製。

D まとめ

八蛇口遺跡からは、縄文時代早期・前期の土坑と近代の「赤ベト」置き場（集積場）に伴う遺構を検出することができた。遺物では、当地では類例の少ない縄文時代草創期の押圧縄文土器や早期の押圧文土器が出土した。町内の飯縄山麓では、だづま原遺跡、宮浦遺跡、つつじヶ原遺跡などの旧石器時代の遺跡が分布し、だづま原遺跡からは旧石器時代と縄文時代草創期のまとまった石器群が出土している（中村1997）が、これまで縄文時代草創期の土器は未発見であった。この時期の土器では原遺跡（小柳1983）につく出土数であり、類例の少ない当該期の事例を追加できた。ほとんどが小片であるため、これまで見過ごされている可能性もある。今後の調査でも留意していきたい。

近代の柱穴列は、「赤ベト」置き場（集積場）に伴う遺構と判断した。「赤ベト」の採掘がおこなわれていたことは周知のことであったが、それと関連する遺構はこれまで不明であった。今回の調査によって、「赤ベト」置き場の状況を知ることができたことは大きな成果であった。町内初の戦争関連遺跡の調査となったが、思いのほか残存状況も良好であった。「赤ベト」の採掘現場やその置き場等、今後も情報収集を継続したい。

4 裏町遺跡 (挿図1-4)

A 概要

所在地	飯綱町大字牟礼字裏町2503-1番地
北緯	36° 45' 10"
東経	138° 13' 53"
原因	道路舗装工事
調査方法	発掘調査
調査期間	令和元年11月26日
調査面積	約6㎡
出土遺構	なし
遺物	陶器片3点、カワラケ1点、 鉄釘2点

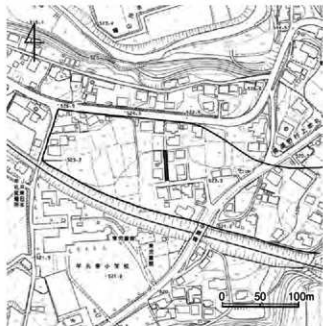
B 調査の経緯と遺跡の概要 (挿図15)

裏町遺跡（59）は鳥居川と八蛇川に挟まれた平坦地で、牟礼村誌には同遺跡から出土した旧石器や縄文前期の土器（諸磯C）が紹介されている（小柳1997）。平成10年（1998）に実施された牟礼村遺跡詳細分布調査においても、縄文前期の土器や平安期の須恵器・土師器などが多数表採されている。平成29年には、遺跡の東方で住宅建設にともなう2件の発掘調査を実施している。調査では、わずかな遺物（縄文前期・後期、陶器片）が出土しただけで遺構は確認できなかった（小柳2018）。

今回の調査地点は遺跡の西方に位置し、平成29年度の調査地点からは西に250m程離れた地点である。未舗装の公道を舗装する工事が計画されたが、遺跡の実態が不明のため本発掘調査に先立って試掘調査を実施することとした。

C 調査結果 (写真53～56)

工事は長さ約40m、幅約3.5mの未舗装の道路敷を約20cm掘削し、アスファルト舗装をする予定であった。遺跡



挿図15 裏町遺跡 範囲と調査地

の概要を把握するため、(住宅への進入路を確保しつつ) 3本のトレンチを設定した(T1~T3)。はじめに、用地の北端から10.5mほど南に長さ2m、幅1mのトレンチを設定した(T1)。路面を20cm削平する計画であったため、路面下50cmをめどに削平することとした。重機で順次削平し、黒褐色土層表面から手掘りで精査した。層序は道路建設にともなう盛土(Ⅰ)(15~20cm)、黒色土層(10YR1.7/1)(Ⅱ)(10~15cm)、黒褐色土層(10YR2/3)(Ⅲ)(5~10cm)、褐色土層(10YR4/4)(Ⅳ)(40cm以下)となっている。遺構は確認できなかった。遺物は、近世の陶器片が1点出土している。

T2は、T1から11mほど南に設定した。長さ3m、幅0.8mの規模となった。重機によって順次削平し、黒褐色土層表面から手掘りで精査した。層序はT1と同様であった。遺構は確認できなかった。遺物は、近世の陶器片が1点、茶焼きの甕(口縁部)1点、カワラケ1点、鉄釘が1点出土している。

T3は、T2から9mほど南に設定した。長さ2m、幅0.8mの規模となった。黒褐色土層表面から手掘りで精査した。層序はⅡ層が確認できず、盛土(Ⅰ)(15~20cm)、Ⅲ層(5~10cm)、Ⅳ層(10~15cm)、礫混じりの黄色粘質土(ローム層)(Ⅴ)(40cm以下)となっている。遺構は確認できなかった。遺物は、鉄釘が1点出土している。

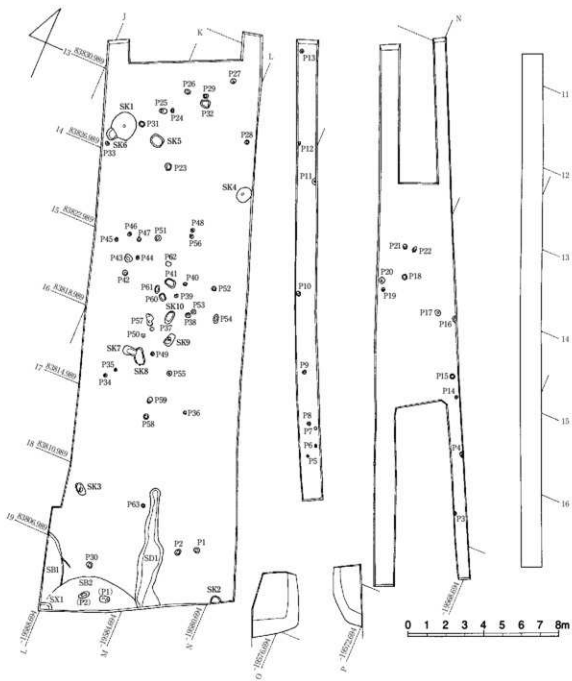
工事は遺跡に大きな影響を与えないと判断し調査を終了した。

※本報告書で記述した石器類の石質については、いづね歴史ふれあい館副館長富樫均氏のご教示をえた(富樫氏によれば、砂岩・泥岩・頁岩の違いは粒子の大ききで区別するため、観察する人によって区分が変わる可能性があるとのことである)。

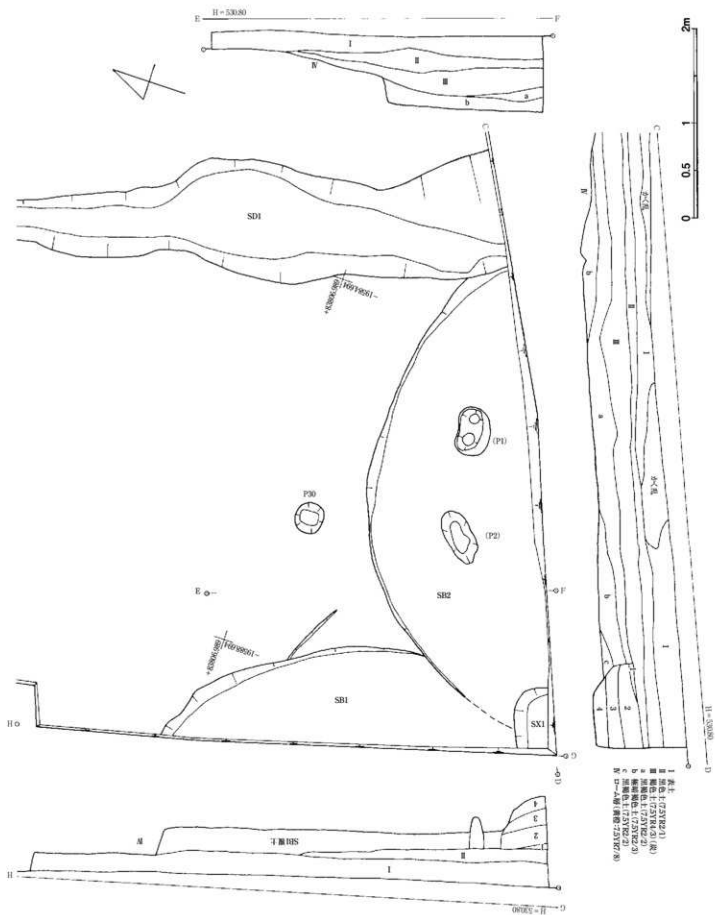
関係する主な文献

- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料第一巻上』
- 小林 孚 1970 『遺跡探訪(4) 上水内郡三水村赤塩遺跡』『長野』第29号 長野郷土史研究会
- 小林 孚 1976 『縄文中期』『上水内郡誌 歴史篇』上水内郡誌編集会
- 高橋 桂ほか 1979 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』牟礼村教委
- 大久保邦彦 1979 『三水村上赤塩遺跡出土縄文中期中葉の深鉢形土器』
『研究ノート3 地域研究の方向』千曲川水系古代文化研究所
- 森 尚登・島田 恵子 1980 『明尊寺・茶白山遺跡』牟礼村教委
- 三水村誌編集委員会 1980 『三水村誌』三水村役場
- 島田 恵子ほか 1981 『前田遺跡』牟礼村教委
- 小柳 義男 1983 『上水内郡三水村原遺跡出土の遺物』『しなのろじい』200号 千曲川水系古代文化研究所
- 笹澤 浩ほか 1986 『前高山窟跡群』牟礼村教委
- 寺内 隆夫 1991 『長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について』
『長野県考古学会誌61・62』長野県考古学会
- 小柳 義男ほか 1992 『平出遺跡群発掘調査報告書』牟礼村教委
- 小柳 義男ほか 1994 『庚申塚古墳発掘調査報告書』牟礼村教委
- 谷藤 保彦・関根 慎二編 1995 『中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 小柳 義男 1997 『上赤塩遺跡発掘調査報告書—縄文中期の集落址—』三水村教委
- 中村 由克 1997 『飯縄山東麓牟礼村だつま原遺跡・宮浦遺跡出土の旧石器時代・縄文時代草創期の石器』
『長野県考古学会誌』83
- 小柳 義男 1997 『牟礼のあけぼの』『牟礼村誌上』牟礼村誌・学校誌編集委員会
- 青山 紫朗 1997 『戦時下の生活』『牟礼村誌下』牟礼村誌・学校誌編集委員会
- 横山かよ子ほか 1998 『家岸遺跡』牟礼村教委
- 牟礼村教委 2000 『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』
- 笹澤 浩ほか 2003 『芋川氏館跡発掘調査報告書』三水村教委

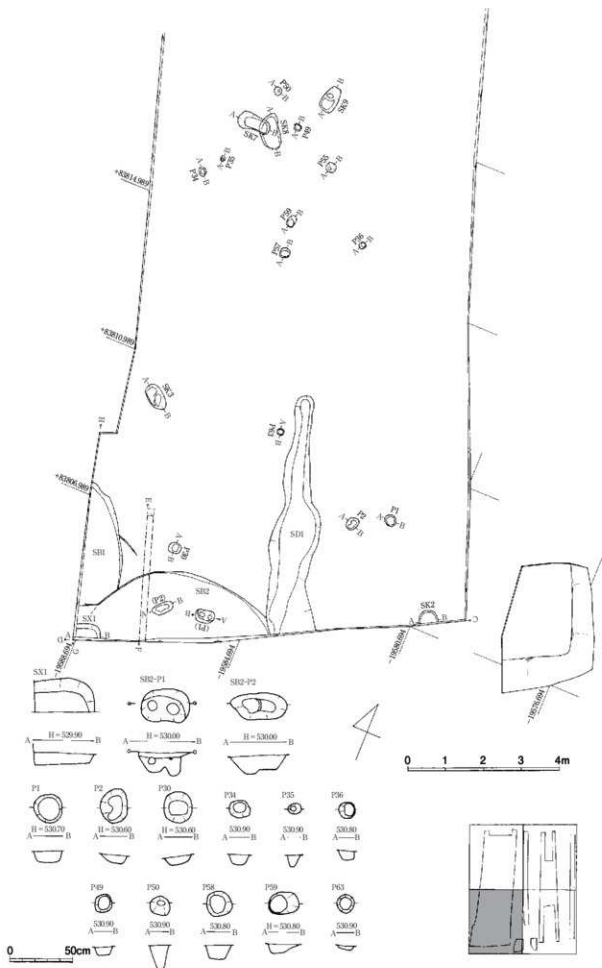
- 寺内 隆夫 2003 「特論 山屋敷I遺跡出土土器に見る中部高地地域・関東地方との交流関係」
 『上越市史 資料編2 考古』
- 笹沢 浩ほか 2004 『田中下土浮遺跡・芋川氏館跡（第3次）発掘調査報告書』 三水村教委
 中宿区誌編纂委 2005 『区誌 中宿のあゆみ』
- 上條 信彦 2006 「縄文時代刻文付石皿の研究（一）」『信濃』第58巻第11号 信濃史学会
 上條 信彦 2006 「縄文時代刻文付石皿の研究（二）」『信濃』第58巻第12号 信濃史学会
- 笹澤 浩・横山かよ子ほか 2008 『小玉遺跡』 飯綱町教委
- 小林 達雄編 2008 「総覧縄文土器」 ㈱アム・プロモーション
- 中野 亮一 2009 「(主) 長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
 長野県埋蔵文化財センター
- 笹澤 浩ほか 2012 『小野遺跡』 飯綱町教委
- 笹澤 浩ほか 2014 『表町遺跡』 飯綱町教委
- 笹澤 浩・横山かよ子 『芋川氏館跡（第4次）・(伝) 願生寺遺跡』 飯綱町教委
- 小柳 義男 2015 「赤塩焼の歴史と窯跡出土遺物」『飯綱町の歴史と文化—いづな歴史ふれあい館紀要』3号
 飯綱町教委 2016 『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』
- 小柳 義男 2017 『長野県上水内郡飯綱町 平成24～27年度町内遺跡発掘調査報告書』 飯綱町教委
- 小柳 義男 2018 『長野県上水内郡飯綱町 平成28・29年度飯綱町内遺跡発掘調査報告書』 飯綱町教委
- 小柳 義男 2019 『長野県上水内郡飯綱町 平成29・30年度飯綱町内遺跡発掘調査報告書—二十塚ほか—』
 飯綱町教委



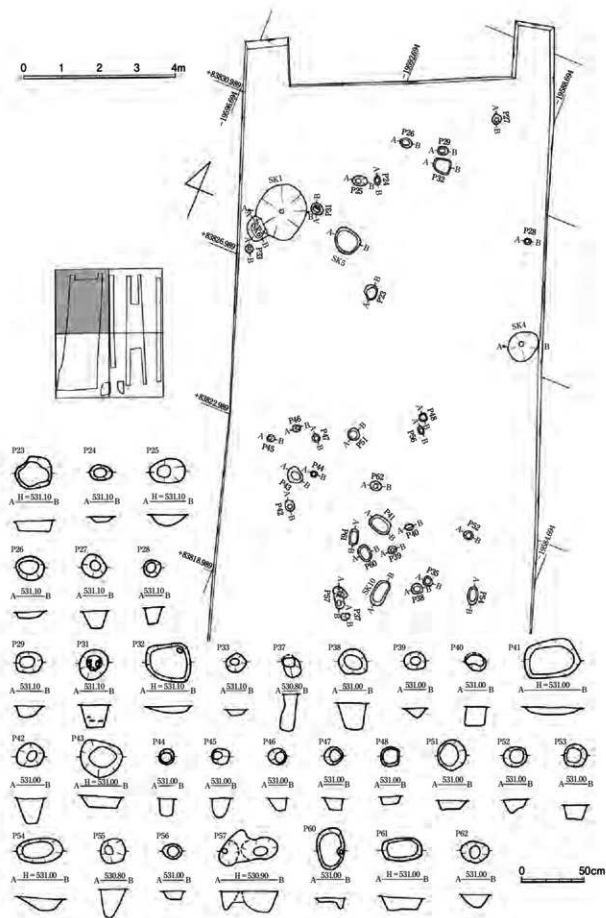
第1図 上赤塩遺跡 遺構全体図

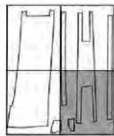
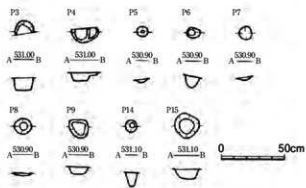
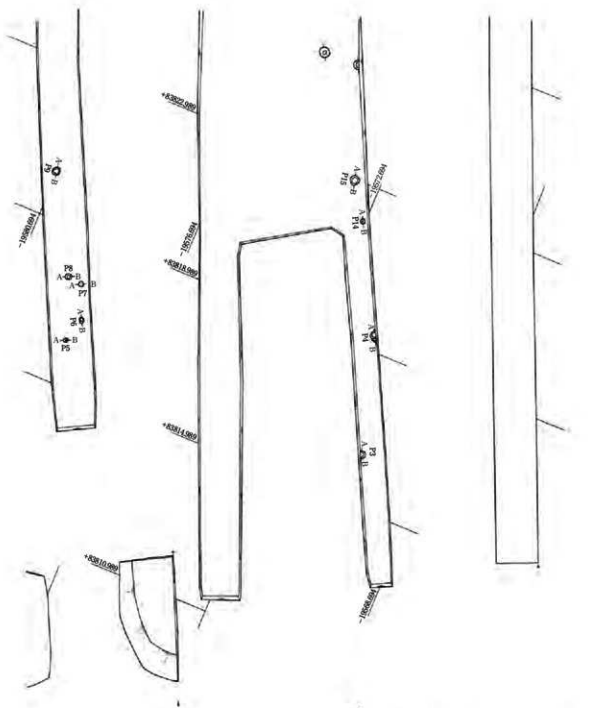


第2図 上赤塩道跡 遺構図 (SB1・SB2・SD1ほか)

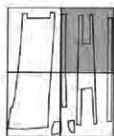
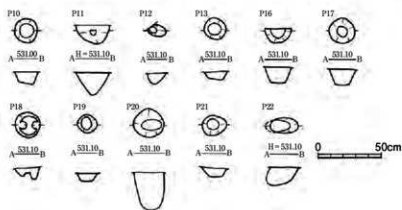
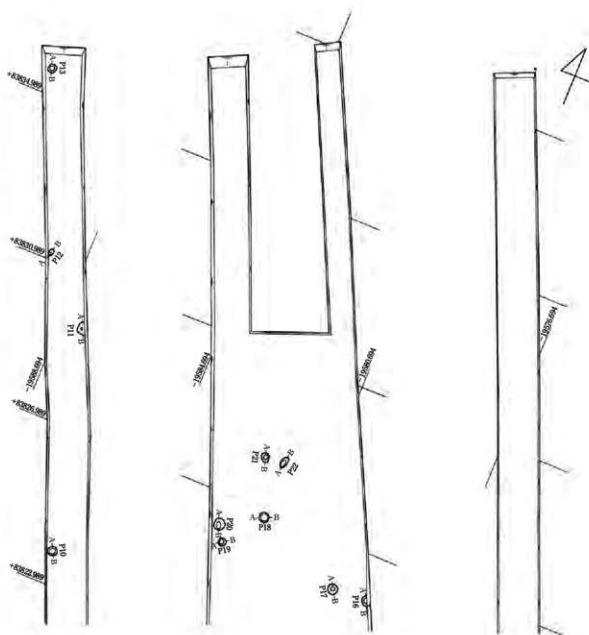


第3図 上赤塩道跡 遺構図

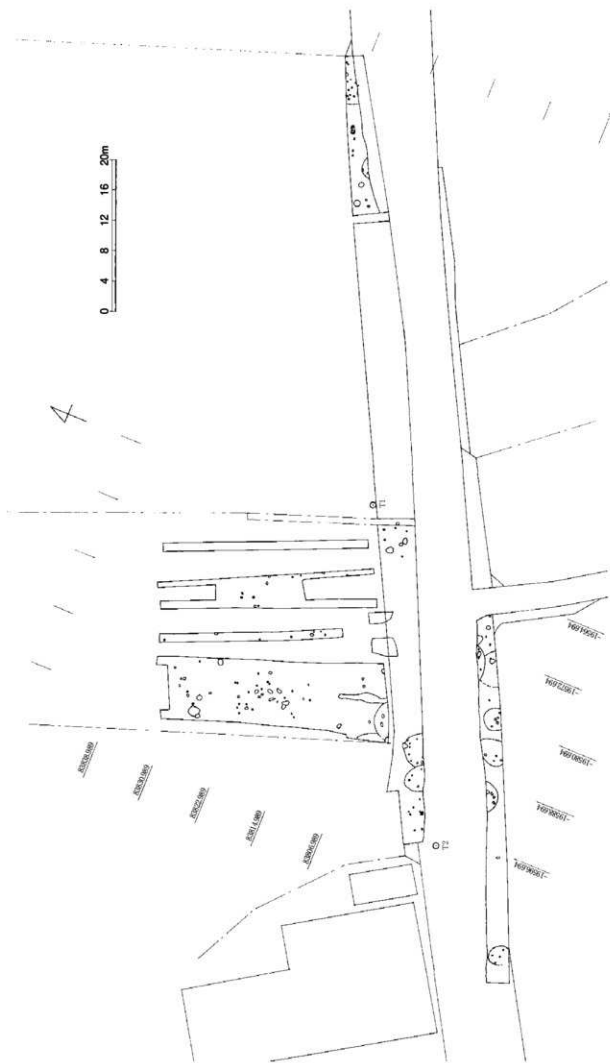




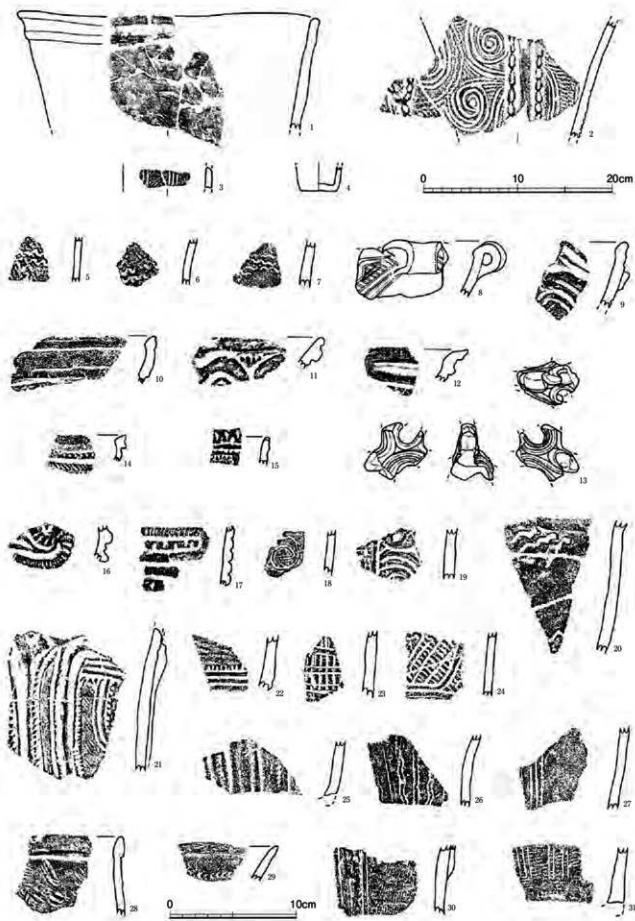
第5図 上赤塩遺跡 遺構図



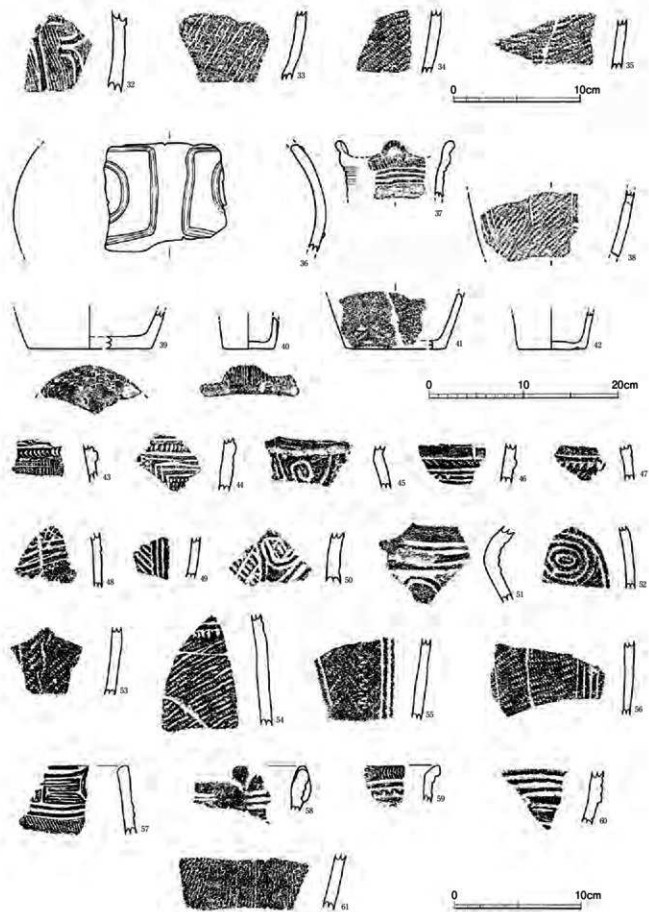
第6图 上赤塩遺跡 出土遺構図



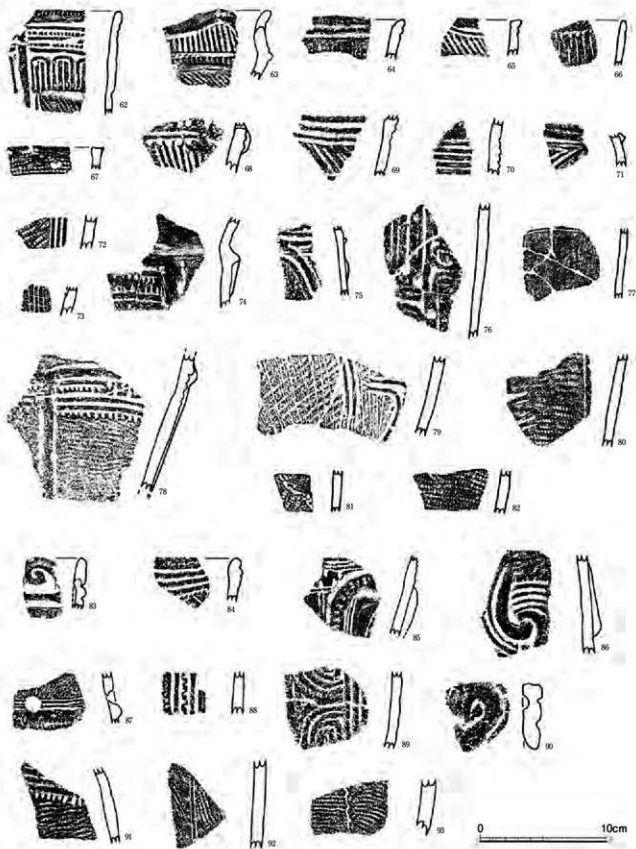
第7図 1965年調査地との位置関係



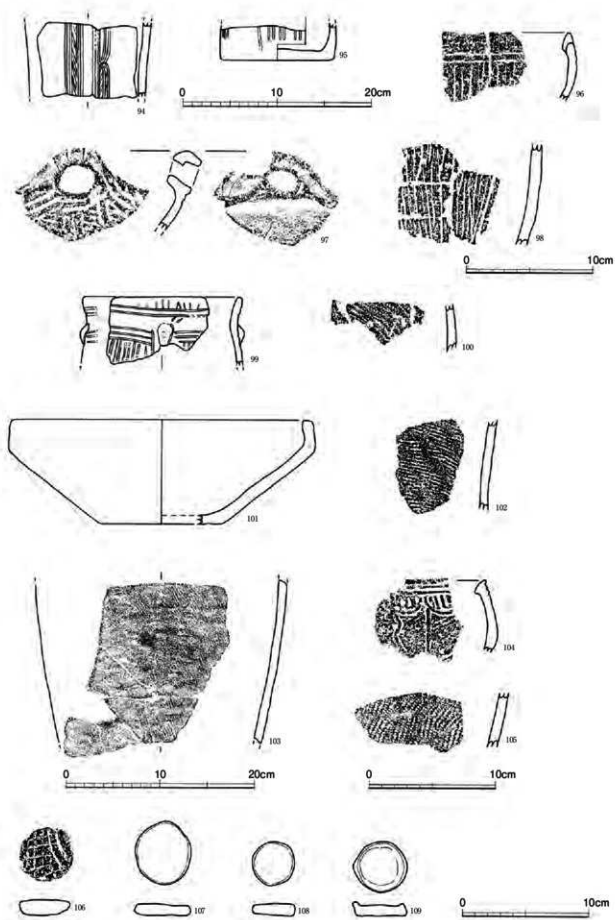
第8圖 上赤壇遺跡 SB1出土土器



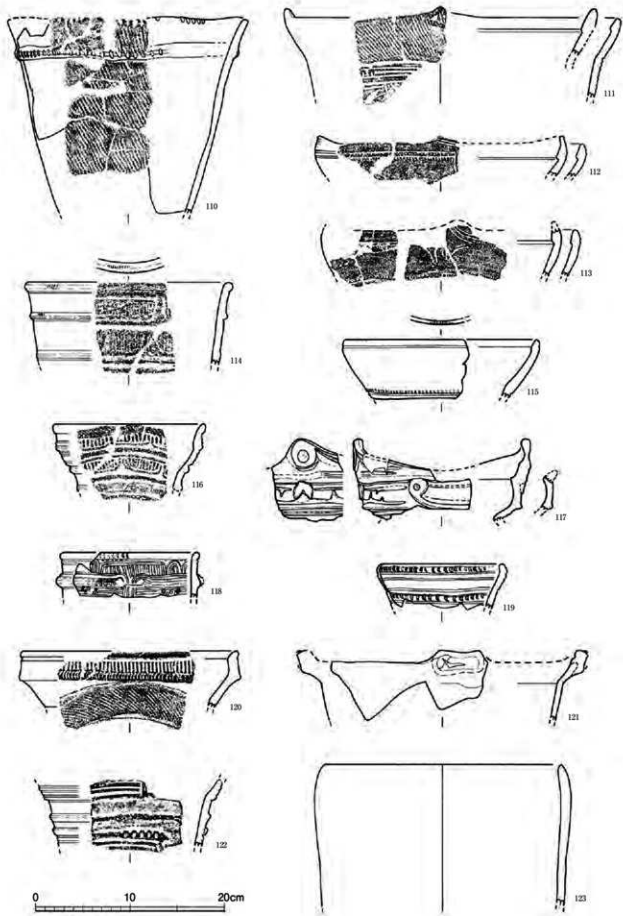
第9图 上赤埴道跡 SB1・SB2出土土器



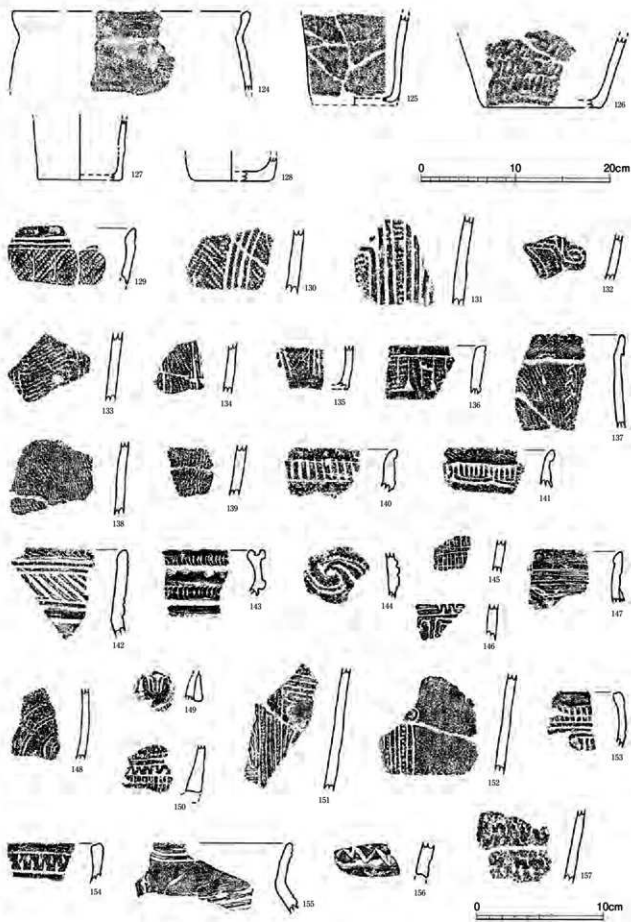
第10图 上赤坂遺跡 SB2出土土器



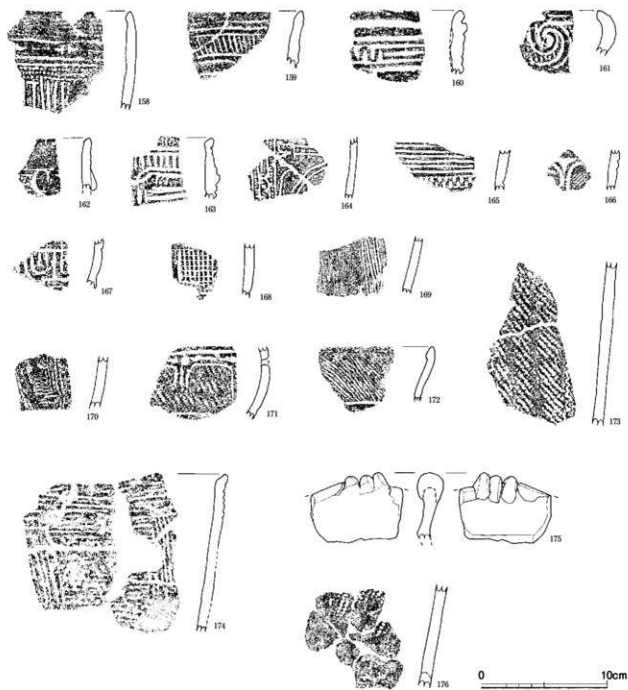
第11図 上赤塩遺跡 SD1ほか出土土器



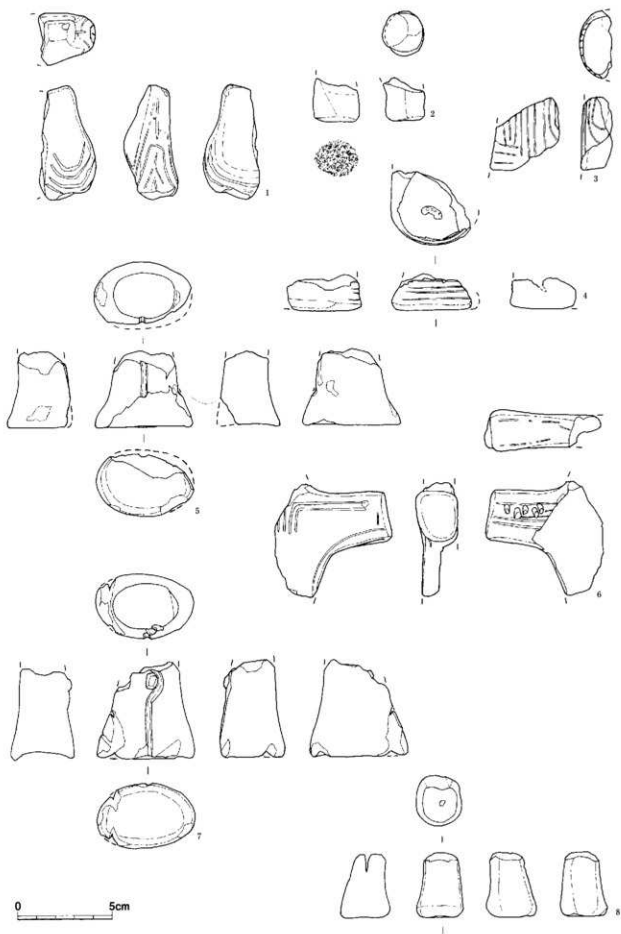
第12图 上赤塩遺跡 遺構外出土土器



第13图 上赤塩遺跡 遺構外出土土器



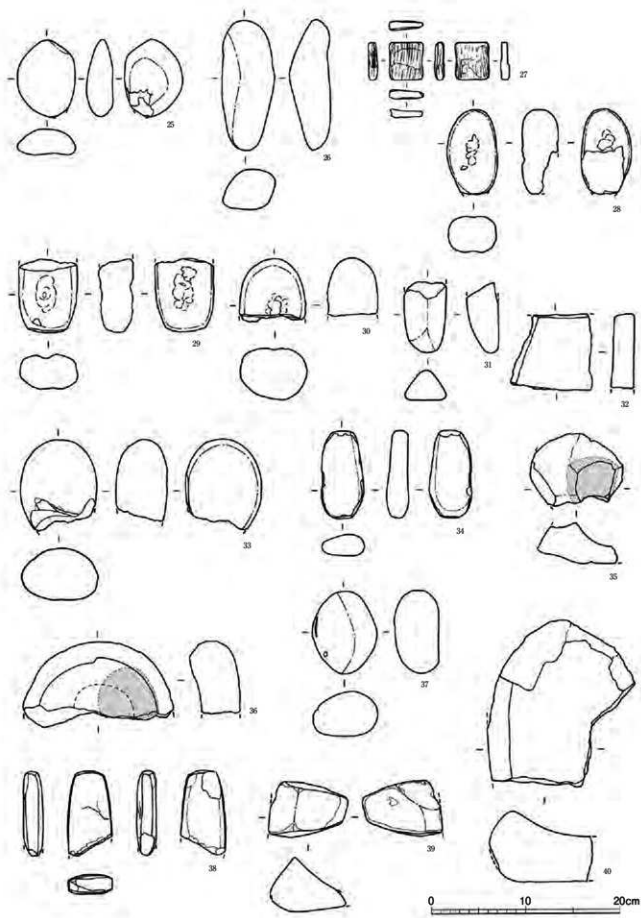
第14图 上赤塩遺跡 遺構外出土器



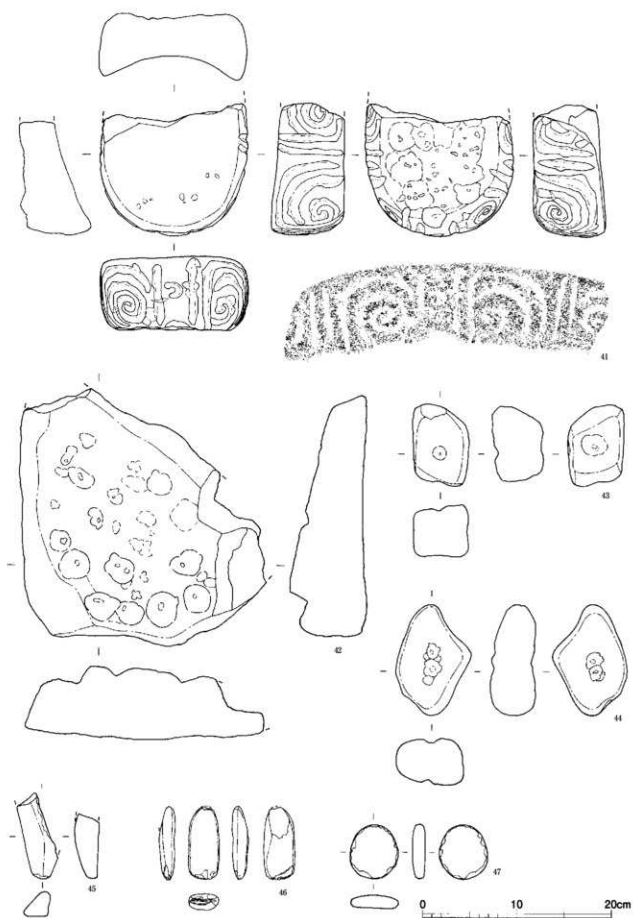
第15圖 上赤埴遺跡 出土土偶



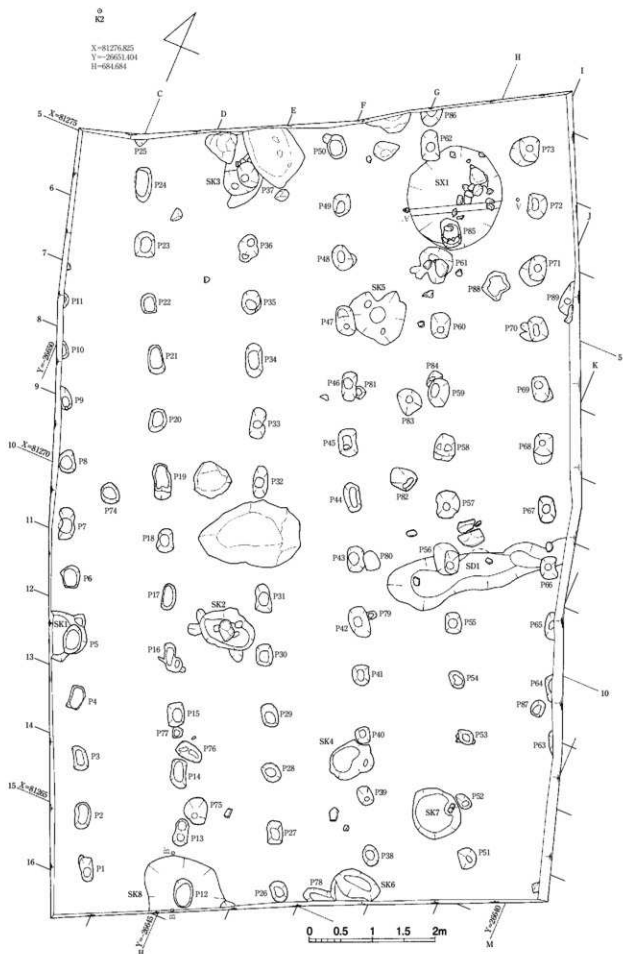
第16圖 上赤壇遺跡 出土石器



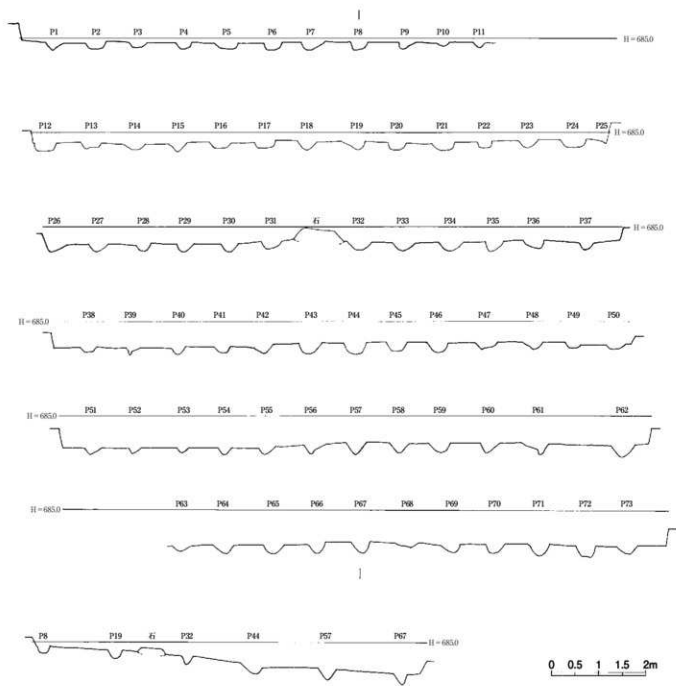
第17圖 上赤塩遺跡 出土石器



第18圖 上赤塩遺跡 出土石器



第19図 八蛇口遺跡 遺構全体図



第20图 八岔口遗址 柱穴列断面



写真1 上赤塩遺跡調査地



写真2 上赤塩遺跡調査状況(状堀)



写真3 上赤塩遺跡調査状況(奥は鹿尾山)



写真4 刻文付石皿出土状況



写真5 刻文付石皿出土状況



写真6 P25 石皿出土状況



写真7 P25 石皿出土状況



写真8 SK2 調査状況

写真図版 2



写真9 SK1とSK6



写真10 SD1



写真11 P37 調査状況



写真12 北西方向からみた調査区 (SK1ほか)



写真13 北西方向からみたSB2



写真14 南西方向からみたSB2、SB1



写真15 北西方向からみたSB1



写真16 北東方向からみたSD1、SB2



写真 17 第 8 区遺物写真



写真 18 第 9 区遺物写真



写真 19 第 10 区遺物写真



写真 20 第 11 区遺物写真

写真図版 4



写真 21 第 12 図遺物写真 (1)



写真 22 第 12 図遺物写真 (2)



写真 23 第 13 図遺物写真



写真 24 第 14 図遺物写真



写真 25 第15号遺物写真(表)



写真 26 第15号遺物写真(裏)



写真 27 第16号遺物写真(1)

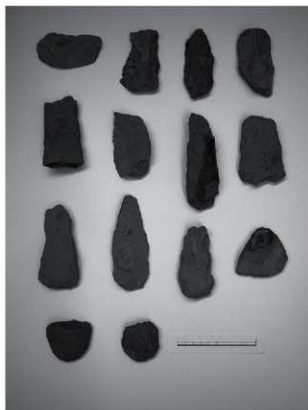


写真 28 第16号遺物写真(2)

写真図版 6



写真 29 第 17 図遺物写真



写真 30 第 18 図遺物写真



写真 31 刻文付石皿



写真 32 刻文付石皿



写真 33 P25 出土石器



写真 34 表町遺跡調査地



写真 35 表町遺跡調査状況



写真 36 表町遺跡出土遺構



写真 37 八蛇口遺跡調査地



写真 38 八蛇口遺跡調査状況

写真図版 8



写真 39 八蛇口遺跡柱穴列検出状況



写真 40 八蛇口遺跡柱穴列検出状況



写真 41 F68内 眼鏡レンズ出土状況



写真 42 SX1 調査状況



写真 43 南東方向からみた柱穴列



写真 44 南東方向からみた柱穴列



写真 45 東方向からみたSKS



写真 46 北西方向からみたSKS



写真 47 南東方向からみた調査区全景



写真 48 北方からみた調査区



写真 49 上空からみた八蛇口遺跡(中央下より)



写真 50 八蛇口遺跡調査区全景

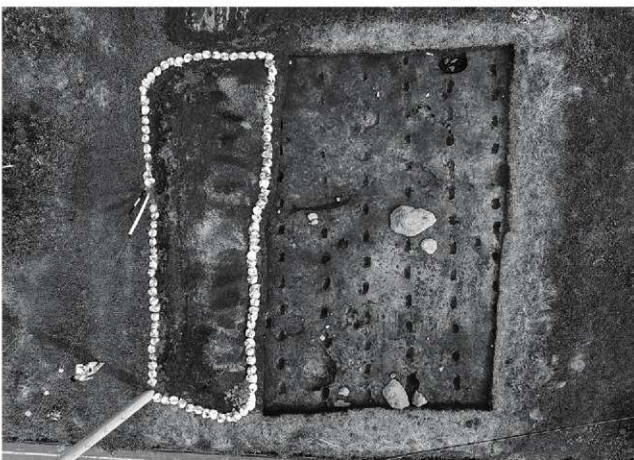


写真 51 八蛇口遺跡調査区全景(写真 49～51 は株式会社測量設計社撮影)



写真 52 八蛇口遺跡出土遺物



写真 53 裏町遺跡調査地



写真 54 裏町遺跡調査状況



写真 55 裏町遺跡 T2



写真 56 裏町遺跡 T3

報告書抄録

書名	平成30年度・令和元年度 飯綱町内遺跡発掘調査報告書 ―上赤塩遺跡・八蛇口遺跡ほか―					
副書名						
シリーズ名						
編著者名	小柳義男					
編集機関	飯綱町教育委員会					
所在地	〒389-1293 長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1 TEL.026-253-2511					
発行年月日	令和2年(2020)3月25日					
主な所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
上赤塩遺跡	長野県上水内郡飯綱町大字赤塩字境ノ峰798・799-1	20590	161	20180508～ 20180511・ 20180514～ 20180613	約400㎡	個人住宅兼店舗建設計画
		世界測地系 北緯 36° 45' 18" 東経 138° 16' 51"				
八蛇口遺跡	長野県上水内郡飯綱町大字川上字八蛇口806-1	20590	25	20190621～ 20190708	約98㎡	防火水槽整備
		世界測地系 北緯 36° 73' 20" 東経 138° 20' 16"				
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	
上赤塩遺跡	集落	縄文時代		住居跡・土坑・溝状遺構 柱穴	縄文中期土器・土偶 打製石斧・磨製石斧・ 刻文付石皿、ドングリ類の実	
八蛇口遺跡	散布地	縄文時代・近代		土坑・鉾石(赤ベト) 置き場施設	縄文土器：草創期・多縄文系土器・早期・押型文土器 近代：眼鏡レンズ	

平成30年度・令和元年度 飯綱町内遺跡発掘調査報告書 ―上赤塩遺跡・八蛇口遺跡ほか―

発行日 令和2年3月25日

発行 飯綱町教育委員会
上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1

印刷 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野市西和田1-30-3